笛吹市文化財調査報告書　第16集

山梨県笛吹市

信虎誕生屋敷遺跡

県営畑地帯総合整備事業春日居第１地区支線農道第３号

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

山梨県峡東地域振興局農務部

笛吹市教育委員会

序

本書は、畑地帯総合整備事業春日居第１地区支線農道第３号建設工事に伴い発掘調査された信虎誕生屋敷遺跡の報告書です。信虎とは武田信虎のことで、戦国大名の雄の一人である武田信玄の父に当たる人物です。本遺跡は信虎が笛吹市春日居町下岩下で生まれたという伝承があることから名付けられた遺跡です。おそくも江戸時代より信虎の母が、実家の岩下氏の屋敷で信虎を生んだという伝説が残されています。

縄文時代から奈良・平安時代の多くの著名な遺跡がある笛吹市においても、中世の遺跡の数はそれほど多くはありません。その上、戦国大名武田氏に関連する遺跡を調査する機会は滅多にありません。調査の結果、本遺跡は信虎が誕生した戦国時代初頭から江戸時代前期にいたるまでの館跡だということが判明しました。残念ながら今回の調査で信虎がこの地で誕生したという明確な証拠は見つかりませんでしたが、信虎が誕生した時期と同じ時代に営まれた遺跡であることが判明し、貴重な成果を得ることができました。

戦国時代から江戸時代の歴史を理解する上で、本報告書が多くの方に役立てられたら望外の喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成などさまざまなご協力、ご指導していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

笛吹市教育委員会

教育長　　山　田　武　人

例　言

1．本書は、山梨県笛吹市春日居町下岩下540-2外に所在する信虎誕生屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は春日居第1地区農道第3号建設工事に先立ち、笛吹市教育委員会が山梨県峡東農務事務所から委託されて実施した。
3．発掘調査は、平成20年8月1日から平成20年10月17日まで行い、笛吹市教育委員会文化財課溝内淳介が担当した。
4．整理作業は、平成21年度と平成22年度に行い、笛吹市教育委員会文化財課大木丈夫が担当した。
5．本報告書の編集・執筆は大木丈夫が行った。
6．本調査にかかわる出土品、図面、写真等は笛吹市教育委員会で保管している。
7．発掘調査から報告書作成にいたるまで、次の諸氏、諸機関から貴重なご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

網倉邦生　石神孝子　小野正文　佐々木　満　末木　健　保坂和博　保坂康夫
野代幸和　山梨県教育委員会学術文化財課　山梨県埋蔵文化財センター　山梨県立考古博物館

＜調査組織＞

平成20年度

笛吹市教育委員会　教育長　山田武人
笛吹市教育委員会　文化財課　課長　中山孝仁
笛吹市教育委員会　文化財課　リーダー　伊藤修二
笛吹市教育委員会　文化財課　調査担当　溝内淳介
・発掘調査参加者
荒川公子　荒川奈津江　奥村澄江　土屋常子　土屋美保子　天川睦美　中込　榊
藤原さつき　三沢圭太　宮川仁孝　望月翔太

平成21・22年度

笛吹市教育委員会　教育長　山田武人（平成21・22年度）
笛吹市教育委員会　文化財課　課長　中山孝仁（平成21年度）
笛吹市教育委員会　文化財課　課長　小渕忠秋（平成22年度）
笛吹市教育委員会　文化財課　リーダー　伊藤修二（平成21年度）
笛吹市教育委員会　文化財課　リーダー　内田裕一（平成22年度）
笛吹市教育委員会　文化財課　整理担当　大木丈夫（平成21・22年度）
・室内整理参加者
小田切健吾　高野眞寿美　西山和子　藤原さつき　渡辺利江

凡　例

1．本書中の地図は、国土地理院「塩山２万５千分の１」をもとに加筆した。
2．本書における図の縮尺は、全体図の第1トレンチ・第3～6トレンチは1/80、第2トレンチは1/100、他は原則として掘立柱建物・柱穴列・溝状遺構・不明遺構は1/60、竪穴状遺構・井戸跡・土坑は1/30、遺物は1/3である。
3．遺構の挿図中の　はカクラン、　は石をあらわす。
4．遺物の挿図中の断面の　は陶器、　は椀をあらわす。
5．表の（　）は現存値をあらわす。
6．遺物の注記の略号はKNYである。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査経過・・・

挿図目次

第１図　信虎誕生屋敷遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図　周辺遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３図　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第４図　第２トレンチ全体測量図 ・・・・・・・・・・・9～10
第５図　第１・第３～第６トレンチ全体測量図 ・・・・・11
第６図　１号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・12
第７図　２号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・13
第８図　１号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・13
第９図　１号竪穴状遺構出土遺物 ・・・・・・・・・・・・13
第10図　１号・２号柱穴列・・・・・・・・・・・・・・・・14
第11図　柱穴列出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・14
第12図　１号井戸跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第13図　１号井戸跡出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・15
第14図　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第15図　土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第16図　溝状遺構（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第17図　溝状遺構（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第18図　溝状遺構出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・20
第19図　溝状遺構出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・21
第20図　ピット群詳細図（1）・・・・・・・・・・・・・・22
第21図　ピット群詳細図（2）・・・・・・・・・・・・・・23
第22図　１号不明遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第23図　１号不明遺構出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・25
第24図　２号不明遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第25図　２号不明遺構出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・25
第26図　遺構外遺物（1）・・・・・・・・・・・・・・・・26
第27図　遺構外遺物（2）・・・・・・・・・・・・・・・・27
第28図　信虎誕生屋敷遺跡遺構配置図 ・・・・・・ 31～32

図版目次

図版１　第１トレンチ全景
第２トレンチ全景（東から）
第２トレンチ全景（西から）
１号掘立柱建物跡
１号竪穴状遺構
１号井戸跡
２号溝状遺構
４号溝状遺構
図版２　１号溝状遺構
５号溝状遺構
第３トレンチ全景
６号溝状遺構
第４トレンチ全景
６号土坑
７号土坑
７号溝状遺構
図版３　８号溝状遺構
第５トレンチ全景
第６トレンチ全景
９号溝状遺構
１号竪穴状遺構・柱穴列出土遺物
１号井戸跡出土遺物
土坑出土遺物
１号井戸跡・４号土坑・１号溝状遺構出土遺物
図版４　１号溝状遺構出土遺物
１号溝状遺構出土擂鉢
１号溝状遺構出土内耳
３号溝状遺構出土かわらけ
７号溝状遺構出土かわらけ
４号溝状遺構出土かわらけ
4･6号溝状遺構出土遺物
１号不明遺構出土遺物
２号不明遺構出土陶器①
２号不明遺構出土陶器②
２号不明遺構出土遺物
２号不明遺構出土陶器③
図版５　遺構外出土遺物（中世）
遺構外出土陶磁器（中世）
遺構外出土擂鉢（中世）
遺構外出土遺物片口・内耳
遺構外出土かわらけ（近世）
遺構外出土陶器（近世）
遺構外出土陶磁器（近世）
遺構外出土灯明受皿（近世）
土製品
鉄製品
石製品（擂鉢）
石製品
水晶

表目次

第１表　ピット一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・ 23～24
第２表　土器類観察表 ・・・・・・・・・・・・・・ 27～28
第３表　漆器観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第４表　鉄製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第５表　石製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第１章　調査経過

第１節　調査にいたる経緯

信虎誕生屋敷遺跡は、平成13年度に山梨県埋蔵文化財センターにより埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査事業に伴い、発掘調査がなされた。そこでは、15～16世紀のものと考えられる柱穴、土坑、溝などの遺構が確認され、同時代の遺物も出土したことが報告されている。また、本遺跡内で大正６年（1918）に甲州金と呼ばれる戦国時代の金貨３点が出土しており、中世の遺跡であることがわかっている。

平成19年度に山梨県峡東農務部から、笛吹市春日居町下岩下地内に春日居第１地区支線農道３号を建設するに当たり、遺跡の有無の照会がされた。農道建設の対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である信虎誕生屋敷遺跡と中川田遺跡に計画されていることが判明した。すでに、県埋蔵文化財センターが計画地付近で発掘調査を行い、遺構・遺物が出土していることから、当該地にも遺跡の存在が想定された。

そのため、試掘調査が必要と考えられ、文化庁と県の補助金を受け、笛吹市教育委員会が試掘調査を平成20年２月18日～20日にかけて実施した。調査対象面積は約510㎡であった。その結果、溝状の遺構が検出され、中世のものと思われる遺物も出土したため、記録保存のための発掘調査が必要と判断された。調査結果を踏まえ、山梨県峡東農務事務所と市教育委員会で協議をした結果、平成20年度に本調査することになった。これらの調査経費と報告書作成にいたるまでの整理作業費を山梨県峡東農務事務所が負担することに決まった。

第２節　調査経過と調査方法

平成20年８月１日から周知の埋蔵文化財包蔵地である信虎誕生屋敷遺跡の範囲内の農道拡幅箇所に重機による表土剥ぎを実施した。住宅への侵入路のような現在利用されている道路など掘ることができない箇所を除いて表土を剥いだ。最初に第１トレンチ～第４トレンチまで行った。第５・６トレンチは９月16･17日に表土の掘削を行った。表土の掘削は、遺構確認面直上まで行い、それからは、ジョレンで掘り下げた。また、第３図のように、東から第１トレンチと名付け、第５トレンチまで既存道路の北側に、第６トレンチは既存道路南側に設定した。グリッドは任意に５ｍ×5mを設定した。

８月５日に機材の搬入を行い、６日に任意の杭を設定した。７日より精査に入った。遺構が確認された場所においては、移植ゴテなどを使用して、丁寧に掘り下げを行った。遺物は平板測量によって、原位置の記録を行い、取り上げた。遺構も平板測量により記録した。

第１トレンチは、遺物は確認されたが、遺構は確認できず、石が多量に出土した。第２トレンチは、井戸跡、溝状遺構、ピットなどの遺構が確認できた。第３トレンチは、溝状遺構を検出している。第４トレンチは、土坑、溝状遺構、ピットが見つかっている。第５トレンチは、調査面積の約1/3が撹乱をうけており、遺構の確認にはいたらなかった。第６トレンチでは、溝状遺構を検出し、遺物も出土した。そして、調査が終了したトレンチから埋め戻しに入り、10月17日に機材を搬出し、現場作業は終了した。文化財保護法に基づく書手続きは以下のとおりである。

平成20年８月12日に文化財保護法99条に基づく発掘通知を山梨県教育長へ提出。

平成20年10月20日に埋蔵文化財の発見通知を笛吹警察署へ提出。

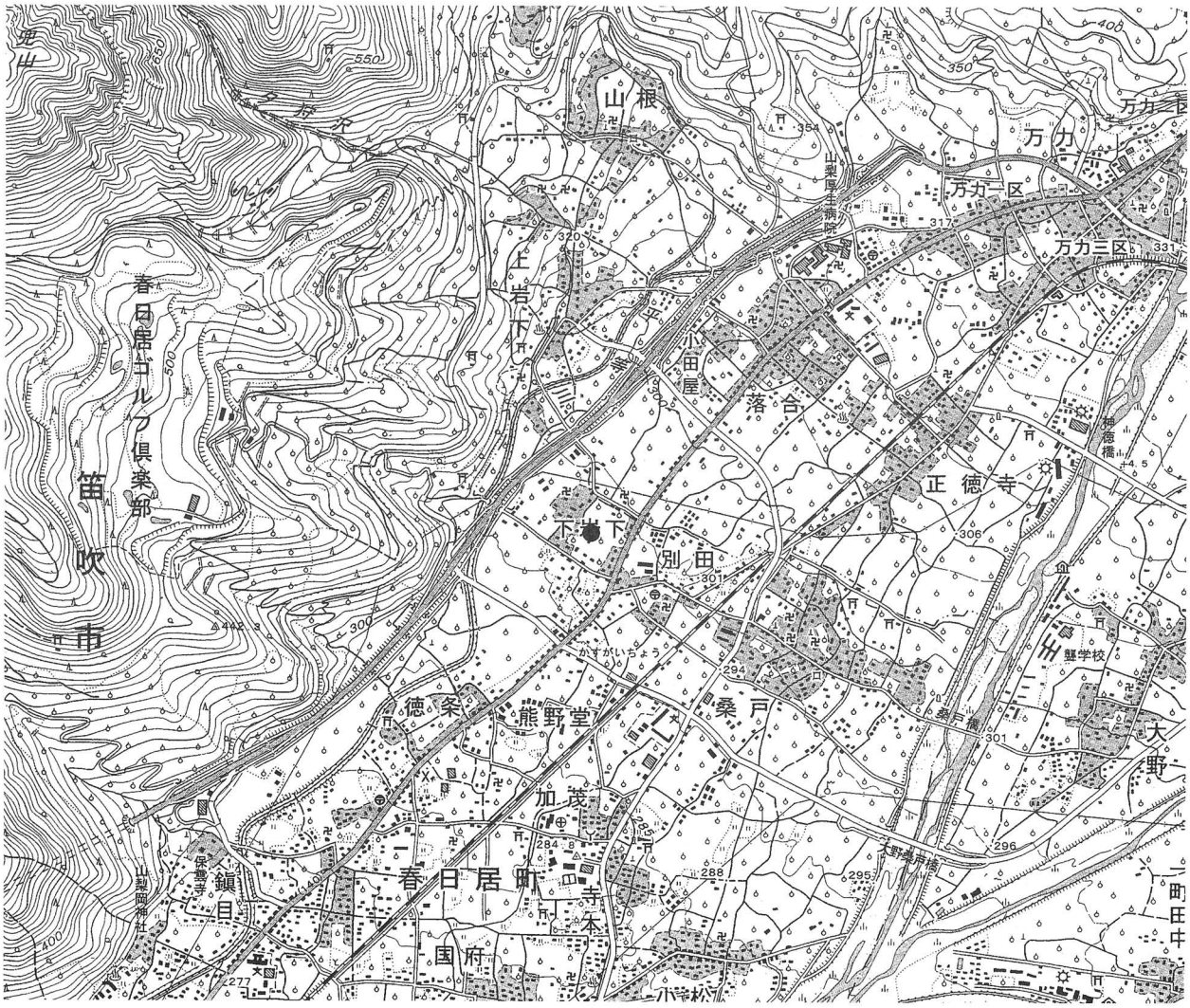
整理作業は、平成21年と22年度に断続的に行った。遺物の洗浄、注記、遺物の接合を行い、実測の可能な遺物の実測を行った。また、重要な遺物に関しては、小片でも実測図を作成した。遺構図面の整理、遺物の検討を加え、遺物の実測図と遺構図面のトレースをして、報告書の版下作成を実施した。そして、平成22年度末に報告書刊行にいたった。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

山梨県笛吹市は甲府盆地の中央部やや東よりに位置している。笛吹市は、西側に甲府市、東側に甲州市、北側に山梨市、南側に南都留郡富士河口湖町と境を接している。市の総面積は201.92k㎡である。笛吹市の地理的特徴は、市の名前の由来となっている笛吹川が北東から南西へと流れていることである。その笛吹川には、狐川、浅川、金川、日川などの支流が存在し、日川には大石川、京戸川などの支流が流れ込み、これらの河川により形成された扇状地が市の南東側に広がっている。それに対し市の北西側は、大蔵経寺山、兜山、棚山などの秩父山地の前衛の山々が連なり、これらの山塊から運ばれてきた土砂が笛吹川や平等川の流れにより拡散したことによってできた沖積地である。

信虎誕生屋敷遺跡は、市北西の旧春日居町下岩下にある。下岩下は、北側が山梨市の上岩下と、南は字熊野堂と境を接している。字名の由来は、西方に兜山と呼ばれる岩山があり、その麓に位置しているためつけられたといわれる。中世には岩下郷と呼ばれていたが、江戸時代の貞享元年（1684）の検地の時に上下に分村した。本遺跡は、平等川と笛吹川にはさまれた河岸段丘上にあり、現在は宅地やぶどう畑として利用されている。また、遺跡南西には青梅街道と秩父街道の分岐があり、交通の要衝である。



第１図　信虎誕生屋敷遺跡位置図（S=1：25,000）

1 信虎誕生屋敷　2 中川田遺跡　3 柳田遺跡　4 別田北遺跡　5 市道遺跡　6 別田南遺跡　7 熊野北遺跡　8 裏町遺跡　9 上町田遺跡
10 小川実右エ門屋敷跡　11 加茂東遺跡　12 加茂西遺跡　13 桑戸遺跡　14 春日神社裏遺跡　15 神東町遺跡　16 熊野南遺跡
17 椚田遺跡　18 寺本廃寺跡　19 大中寺遺跡　20 国府遺跡　21 狐塚遺跡　22 鎌田塚古墳　23 天神塚古墳　24 田島稲荷塚古墳

第２図　周辺遺跡分布図（S=1：10,000）

第２節　歴史的環境

先述したように、信虎誕生屋敷遺跡は、春日居町下岩下にあり、山梨市との境に所在する。本遺跡が存在する笛吹川右岸は周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く知られている。本遺跡周辺も濃密に遺跡が分布する地域である。

笛吹市東部は縄文時代の遺跡が豊富にあることで有名であるが、本遺跡周辺においてはほとんど知られていない。特に旧春日居町内で縄文時代の遺跡は全くといっていいほど確認されていない。

それに対し、山梨県内では珍しい弥生時代の遺跡が下岩下地内で発掘調査されている。平成11年度に山梨県埋蔵文化財センターにより調査された横町遺跡である。弥生時代後期の住居跡が発見され、長野県北部から東部で出土する土製品が出土している。また、横町遺跡の南西には上町田遺跡があり、平成19年度に調査され、弥生時代後期から平安時代の遺物が出土している。

大蔵経寺山、兜山、棚山の東向きの斜面には、多くの後期古墳が密集している。狐塚古墳からは、仏具の銅容器、寺の前古墳からは環頭大刀柄頭、平林２号墳からは馬具や武具などが出土している。古墳時代の遺跡では、桑戸（後町）遺跡がある。平成４年度に県埋蔵文化財センターが調査し、古墳時代中期の住居跡が見つかっている。熊野南遺跡と大侭遺跡は古墳時代の遺跡で、熊野北遺跡は古墳時代後期の遺跡として知られる。椚田遺跡は、昭和63年度に旧春日居町教育委員会が、平成19年度に調査を実施し、古墳時代後期の住居跡を発見している。熊野北遺跡、保雲寺橋遺跡、神東町遺跡は古墳時代から平安時代の遺跡である。

古代になると、春日居町寺本に寺院が建設される。寺本廃寺跡は７世紀末の寺院で、県内では一番古いものとされる。また、この地域は山梨郡に属していたと考えられ、郡名の由来となった山梨岡神社が鎮目に鎮座している。寺本古代寺院のすぐ南に国府（こう）遺跡が存在する。その名の通り、甲斐国に最初に国府が置かれた場所、または山梨郡家と推定されている。昭和63年度の調査で礎石建物跡や基壇状の遺構などを検出しており、この推定を裏付けるものとされる。

奈良・平安時代の集落跡は、先述した桑戸遺跡、椚田遺跡、上町田遺跡、横町遺跡が知られている。他に市道遺跡、中川田遺跡なども平安時代の遺跡である。

旧春日居町内には、中世の遺跡はあまり多くない。特に中世の集落に関する遺跡は皆無に近い状況である。中世の遺跡では、信虎誕生屋敷遺跡のような城館跡が確認されている。本遺跡のすぐ南には、柳田遺跡がある。これは、中世の土豪の原田氏の屋敷跡と考えられる。『甲斐国志』によると、他に原氏の屋敷も下岩下に存在しているという。徳条地区には小川奥右エ門屋敷が存在している。

信虎誕生屋敷遺跡の北の地域の山梨市内にも同様に中世の城館跡が知られている。山梨市上岩下集落背後の御前山には山城がある。御前山城または御前山の烽火台とも呼ばれている。寛正６年（1465）、甲斐国の守護であった武田信昌（武田信虎の祖父）と守護代の跡部景家が、この付近の夕狩沢で合戦に及び、信昌が勝利し、景家は自害したといわれる。この頃に信昌が居所を川田(甲府市)に移したと『甲斐国志』は述べる。また、信昌は「落合殿」とも呼ばれており（「向岳寺文書」（文亀４年）２月27日付）、武田信縄に家督を譲り、山梨市の落合に隠居していたと考えられている。山梨小学校の南西約400mの場所がその地と推定されている。山梨市矢坪の永昌院は武田信昌の菩提寺である。また、『甲斐国志』によると、正徳寺村の聖徳寺が武田信縄の居館と推定し、信虎の父武田信縄の牌子があると伝えている。信虎誕生屋敷遺跡周辺は、武田氏と深い関連があるようである。

また、本遺跡南東約2kmに大野砦がある。天正10年（1582）３月に織田信長により武田氏が滅亡に追い込まれ、その信長も同年の６月に自害した。甲斐国は徳川氏と北条氏の取り合いの地となり、大野砦には北条氏に味方する大村氏が入り、同月穴山氏の家臣穂坂常陸介と有泉大学らの急襲によって落城したと伝えられている。

江戸時代中盤の宝暦13年（1763）に本遺跡内に清水家の陣屋が置かれた。清水家は、９代将軍徳川家

重の第二子重好にはじめる家で、江戸城田安門内に清水第と称される邸を与えられたため、このように呼ばれている。いわゆる御三卿の内の一つである。寛政7年（1795）に重好が亡くなり、跡継ぎがいなかったため、所領没収となり、同年10月に陣屋も廃止された。本遺跡内に稲荷神社があるが、それが陣屋の北東隅と考えられている。

第3節　信虎誕生屋敷と家督継承について

信虎誕生屋敷遺跡は、中世の城館跡として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。信虎とは武田信虎のことで、言わずと知れた武田信玄と父親に当たる人物である。本遺跡の名前の由来は、『甲斐国志』巻之三十八「古跡部」第一に「誕生屋敷」という項があり、下岩下村に「里人武田信虎ノ誕生セシ処ト云伝フ、畠二段八畝九歩、貞享元子年検地ノ時租税ヲ命ゼラル、又正徳寺村聖徳寺ニ五郎信縄ノ牌子アリ、信虎父ナリ、遷移ノ時代詳ナラズ、今按ズルニ此所ハ跡部上野父子ノ居址カ」と記載がある（注1）ためである。ここから、『甲斐国志』が編纂された江戸時代に、下岩下村の人々の間で、武田信虎が生まれた場所が下岩下村に存在すると認識していたことがわかる。そして、廣瀬廣一氏が「誕生屋敷」を当地に比定し（注2)、そのためこの遺跡名が付いたのである。では、信虎誕生屋敷に関連して二、三の考察を加えたい。

まず、信虎の親はどのような人物であったろうか。信虎の父の名は武田信縄である。彼は、武田信昌の息子で甲斐国の守護であった。信縄は、生年不詳（一説に文明3年（1471）に生まれたという)、没年は永正4年（1507）である。信虎はその信縄の嫡男であった。

当時、武田氏の本拠地は甲府市の川田にあったと考えられている（注3)。信虎が下岩下で生まれたという伝承があるのは、母方の実家が本遺跡の地にあったとされるためと考えられる。「菊隠録」という永昌院の二世菊隠瑞潭の法語を集めた語録集の付箋に、「山梨郡岩下村居住岩下越前守、武田信虎母堂桂岩兄也」とあり、武田信虎の母が岩下越前守の妹に当たる人物であることがわかる。つまり、当屋敷の当時の主人は岩下氏となる。岩下という地名を名字として名乗るほどの土豪であるから当時相当勢力持っていたと推測される。だから、岩下越前守の妹が甲斐の守護家に嫁いでもなんら問題がない。信虎の母の実名は伝わっていないが、「菊隠録」の桂岩妙昌大姉が記載されている箇所に付箋があり、「武田信虎公母堂、岩下氏」とあるので、彼女が信虎の母ということになる(注4)。信虎は、岩下越前守の妹が実家へ戻った時、生まれたといわれている。彼女は、永正3年10月17日に亡くなっている。先述したように、続いて夫の信縄は彼女を追うように翌年の2月14日に病没している(注5)。永正2年には信縄の父信昌も亡くなっており、この頃、武田家内では不幸が続いたのである。

一方、高野山持明院が所蔵していた「武田家過去帳－十輪院－」(「高野山引導院過去帳」）の「華岳妙栄大姉大禅尼」について「甲州武田信虎御母様菩提也」とある（注6)。『甲斐国志』には「崇昌院殿華岳妙栄大姉」が信縄夫人であるという記載もある（注7)。武田晴信（信玄）は弘治2年（1556）11月朔日に広厳院へ宛てて寺領寄進状を発給している（注8)。それには次のようにある。

為祖母崇昌院菩提、一宮郷之内拾貫文之所、至于末代令寄附訖、自今以後、改崇昌院之号、可称広厳院者也、恐々敬白、
弘治二年丙辰
　　十一月朔日　晴信（花押）
　　広厳院侍衣閣下

文書の最初に「為祖母崇昌院菩提」とあることから、晴信の祖母が崇昌院だということがわかる。『過去帳』や『甲斐国志』の記載と合わせると、崇昌院が信虎の母親となる。『過去帳』によると、彼女は天文14年（1545）6月19日に亡くなっている。この文書は、翌年の弘治3年が崇昌院の十三回忌にあたり、それに

伴い晴信が寺領を寄進したために発給されたと考えられる。彼女について、春日居町鎮目にある保雲寺に、彼女の位牌があり（注9）、甲州市勝沼の泉勝院は、彼女が中興したと言い伝えられている（注10）。

当時の史料からすると、信虎の母親は二人いたことになる。このことを整合的に理解するにはどうすれば良いだろうか。どちらかの史料について、信憑性が疑われるならばよいのだが、どちらとも信頼できる史料と思われる。

では、信虎の生年から確かめることにしよう。一般的に明応3年（1494）1月6日に生まれたとされる（注11）。だが、秋山敬氏によると、信虎の各系図にみえる生年は、『甲陽軍鑑』の記載などから導き出されたもので、信憑性が低く、『高白斎記』の記載の明応7年1月6日が正しいという（注12）。そうすると、信虎が家督を継ぐのは、信縄が亡くなって直ぐと考えられているので、永正4年である。信虎は、前説が正しければ14歳、後者であれば10歳（数え年）で継いだことになる。いずれにしても信虎は若年で家督を継いだのである。信虎の家督継承は、前者の場合であれば元服した直後かまたはまだしていない、後者であれば元服前の可能性が高い。どちらにしても信虎家督継承時、信虎は未熟であり、後見人が必要であったと考えるのが自然であろう。

ところで、中世には、武家の当主が幼少ある場合や病弱な場合、当主の母親が政治を執ることがあった（注13）。信虎が家督を継いだとき、桂岩妙昌はすでにこの世の人ではなかった。彼女の死は永正3年、信虎家督継承の前年であった。とすると、信虎の後見人がいなくなってしまったことになる。まだ、当時大人になっていない信虎一人の力で、甲斐国を治めることはきわめて困難である。事実、家督を継承した翌年の永正5年、叔父の油川信恵が信虎に対し反乱を起こし、都留郡の小山田氏と武田氏が対立する（注14）。信虎や重臣たちがいくら優秀といえども、この危機的状況を幼少の信虎だけで乗り切るのは大変難しいことではないのか。やはり信虎の後見をする人物が必要であったのではないか。

そうすると、信縄が亡くなったので、彼の夫人の一人である崇昌院が信虎の後見役になったと考えられる。言い換えれば、崇昌院が信虎の継母であるといえるのではないか。単なる側室では、武田家の家政を取り仕切るには荷が重いといえよう。また、福田千鶴氏によると中世において妻が二人以上おり、本妻、別妻と妾を分けて考えるべきではないかという指摘がなされている（注15）。そうすると、桂岩妙昌も崇昌院も両者とも信縄の妻であり、信虎を生んだ桂岩妙昌が本妻で、崇昌院が別妻の可能性がある。また、逆の場合も考えられる。

当時の文献史料をみると、永正5～7年の武田氏と都留郡の小山田氏の対立において、富士山北麓の日蓮宗の僧侶が書き継いだといわれる「勝山記」には、武田軍のことを「国勢」、「国中」と記載されている。「勝山記」中で信虎のことを指すのによく使用される「武田殿」や「屋形」といった文言は使われていない。永正12年10月の武田氏と大井氏との争いで信虎は初めて「勝山記」に「屋形」という語で姿を現す（注16）。一般的に永正5年の信恵との合戦が信虎の初陣と考えられているが、「高白斎記」には「十月四日油川彦八郎ト四郎生害」（注17）、「勝山記」には「此年十月四日武田八郎殿、同子息弥九郎殿・珍宝丸打レサセ玉フ」（注18）とあるだけで、信虎が合戦に参加したかは明記されていない。

また、信虎の発給文書も年記があるものでは、永正14年のものが確認されている最古の文書である（注19）。しかし、甲斐市の慈照寺が所蔵する年未詳の11月13日付けの寺領安堵状は、花押形が永正14年以降の文書とは異なり、署名が「信直」とある（「信虎」と改名するのは永正18年頃と考えられている（廣瀬廣一『武田信玄伝』など）ので、永正14年以前のものと考えられる（注20）。文書には「為右衛門佐志」とあり、同寺に同日付の今井信甫の添状が残っている（注21）ので、「右衛門佐」は今井信房のことであると考えられる。「勝山記」の永正12年条に「当国大井殿屋形トノ合戦、（中略）皆深田ニ馬ヲ乗入テ、無出打死畢ヌ、其ノ人数小山田大和守、衛門助殿・尾曽殿、飯実殿、其ノ外随分面々様二十崎計、是大将分方々也」とあり、「衛門助殿」が今井信房にあたり、先に述べた永正12年の合戦で亡くなっている（注22）。よって、年未詳の慈照寺宛の文書は、永正12年のものと考えられる。一番古い信虎の発給文書は、永正12年のものとなる。「勝山記」においては永正12年10月の大井氏との合戦の記載の「屋形」として

現れる（注16）のが初めてである。「菊隠録」によると、信虎が永正八年に祖父信昌の七回忌法要を行った記載があり（注23）、家督継承後資料上の信虎の初出である。

つまり、信虎が家督を継いで4年間、記録類や発給文書に信虎個人が現れないのである。そうすると、永正8年頃、信虎が独り立ちできたのではないか。信虎が一人前になるまでは、崇昌院が信虎を後見して政治を行っていたと考えられる。

また、崇昌院の菩提を弔う武田晴信の寺領寄進状が出された理由もわかる。晴信は、大永元年（1521）生まれなので（注24）、桂岩妙昌を直接は知らないはずである。崇昌院が信虎の継母であったなら、当然、崇昌院を自分の祖母だと認識していたと考えられる。特に、崇昌院は天文14年まで生存しており、天文10年に晴信は、信虎を駿河へ追放して家督を継承し、この時期、信州伊那を攻略しており、青年期の晴信には彼女は大変身近な人物であったと推測される。晴信にとっての祖母は崇昌院であったので、先に挙げた内容の文書が発給されたと推測される。

信虎の生誕地となると難しい問題である。本遺跡の他に、信昌・信縄・信虎の館の川田館も伝承地なのである。『甲斐国志』には「川田村ノ域ニ旧址アリ、里人信虎ノ誕生屋敷云」とあり（注25）、信虎は「川田五郎」と呼ばれたと記されている。信虎の生誕地についての伝承は下岩下の岩下氏の屋敷跡と川田の館の二つある。だが、秋山敬氏によると、信虎が誕生した頃、父の信縄は現在山梨市の落合に住んでいたとし、その上家臣たちは本貫地を離れ、落合周辺に屋敷を構えていたとされ、だから、信虎は岩下氏の屋敷で生まれたと指摘されている（注26）。文献史料からはどちらが生誕地かを明確にすることはできないが、秋山氏の指摘は大変重要だと思われる。

注

（1）『大日本地誌体系　甲斐国志』第2巻（雄山閣、1970）P178
（2）廣瀬廣一『武田信玄伝』（紙硯社、1944）
（3）『山梨県史』通史編2　中世（2007）など
（4）『山梨県史』資料編6中世3上　県内記録（2001）P342
（5）「高白斎記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P83
（6）『山梨県史』資料編6中世3下　県外記録（2002）P919
（7）『大日本地誌体系　甲斐国志』第4巻（雄山閣、1972）P38
（8）『山梨県史』資料編4中世1　県内文書（1999）801号文書
（9）『大日本地誌体系　甲斐国志』第3巻（雄山閣、1971）P197
（10）『大日本地誌体系　甲斐国志』第3巻、P125
（11）たとえば、前掲（2）書や磯貝正義『定本武田信玄』（新人物往来社、1978）など
（12）秋山敬「武田信虎の生年について」『武田氏研究』第35号（2006）
（13）田端泰子『女人政治の中世』（講談社、1996）など
（14）「勝山記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P224
（15）福田千鶴『淀殿』（ミネルヴァ書房、2007）
（16）「勝山記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P225
（17）「高白斎記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P83
（18）「勝山記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P224
（19）『山梨県史』資料編4中世1　799号文書
（20）『山梨県史』資料編4中世1　1252号文書
（21）『山梨県史』資料編4中世1　1251号文書
（22）「勝山記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P225
（23）『山梨県史』資料編6中世3上P312
（24）「高白斎記」（『山梨県史』資料編6中世3上）P83
（25）『大日本地誌体系　甲斐国志』第4巻、P38
（26）『山梨市史』通史編　上巻（2007）P223～224

第３章　調査の概要と層序

第１節　調査概要

先述したように、調査区を第１トレンチから第６トレンチにわけて調査した。ここでは、各トレンチの調査結果を簡単に述べることにする。

第１トレンチは、約８㎡を調査した。湿地状の土質に多数の礫が混入していた。遺構は確認できなかった。かわらけ、陶磁器が出土している。

第２トレンチは、約205㎡を調査した。掘立柱建物、溝状遺構、竪穴状遺構、土坑、井戸跡、ピットなどを検出している。かわらけや陶磁器が出土している。

第３トレンチは、約８㎡を調査した。溝状遺構が確認されている。遺物も少量であるが出土している。

第４トレンチは、約53㎡を調査した。柱穴列、土坑、溝状遺構、ピットを検出している。

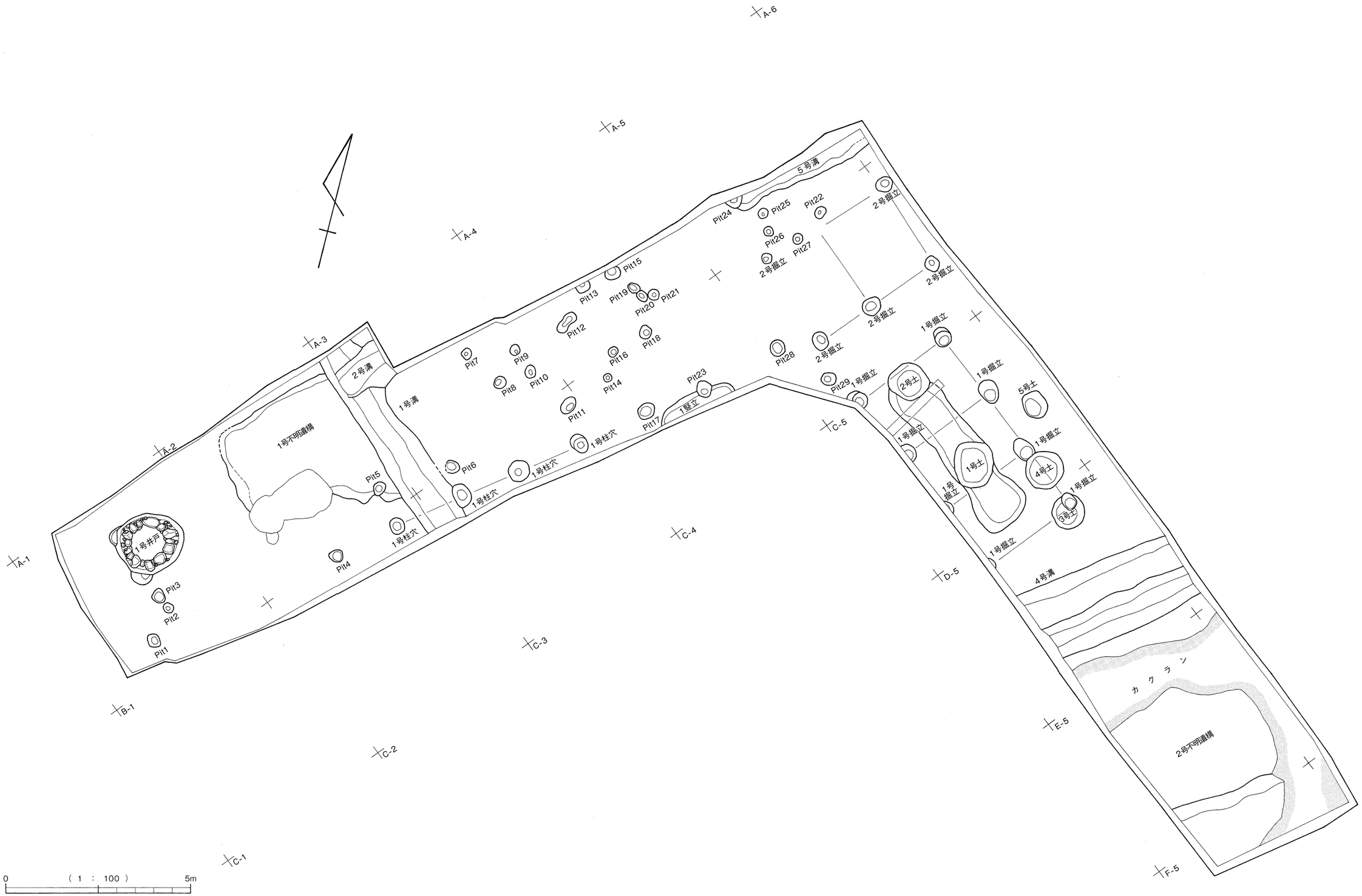
第５トレンチは、約16㎡を調査した。造成されており、遺構確認面より深いごみ穴を確認している。遺物がわずかに出土したのみで、遺構は確認できなかった。

第６トレンチは、約33㎡を調査した。溝状遺構が確認されている。遺物の出土は極めて少なかったが、地表で、遺物を採集することが可能であった。

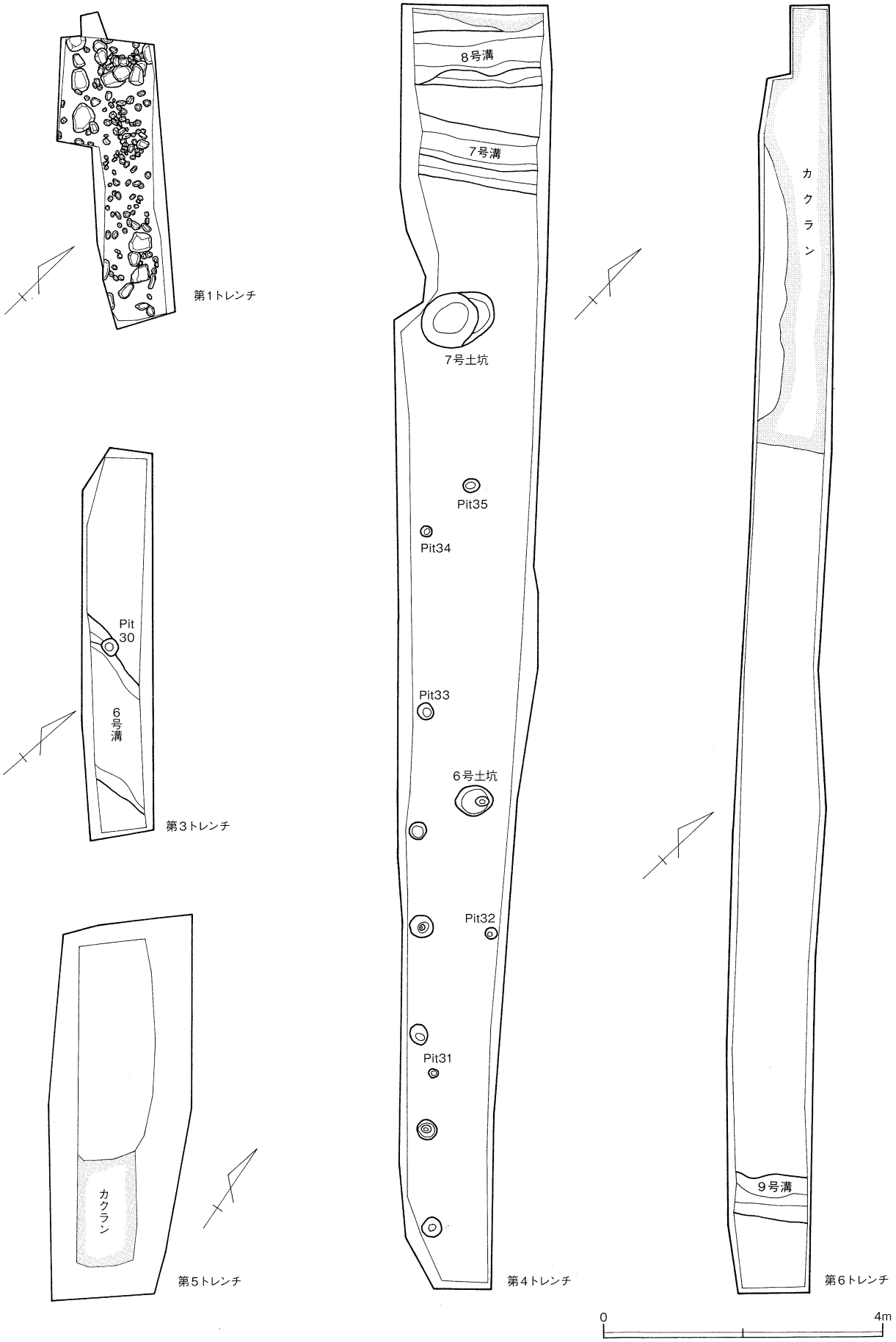
第２節　基本層序

今回調査した箇所の基本の土層は、すべてのトレンチでほぼ同じであった。１層は暗褐色～褐色の耕作土である。２層は、にぶい黄褐色の砂質土であった。そして、灰黄褐色の地山であった。県埋蔵文化財センターが調査した地点の基本土層は、表土、白色砂層、茶褐色土層で、中世の遺構確認面は暗褐色土層である。市の調査地点と県の調査地点では土層の堆積状況は異なっている。

第３図　調査区位置図（S=1：1,000）



第４図　第２トレンチ全体測量図（S=1：100）



第５図　第１・第３～第６トレンチ全体測量図

第４章　発見された遺構と遺物

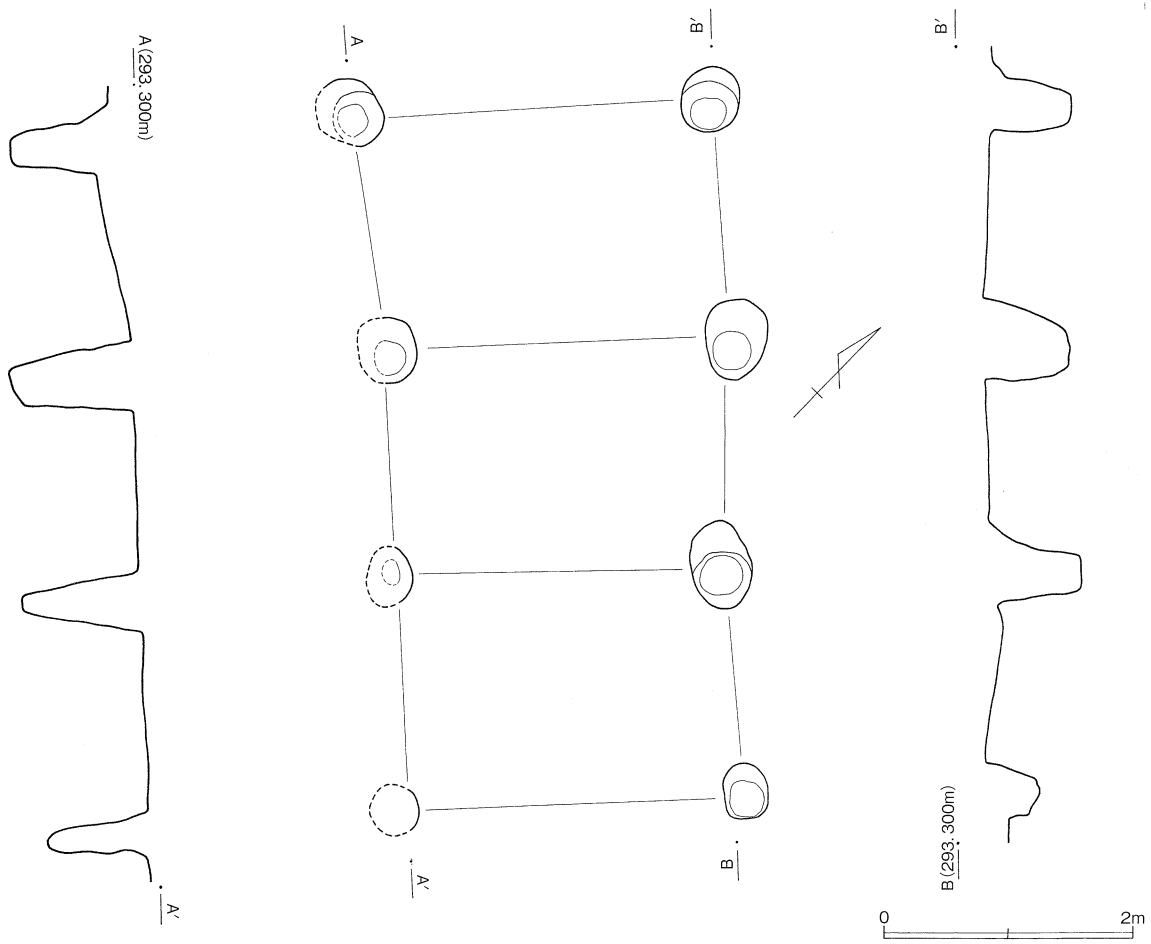
第１節　掘立柱建物

１号掘立柱建物（第６図）

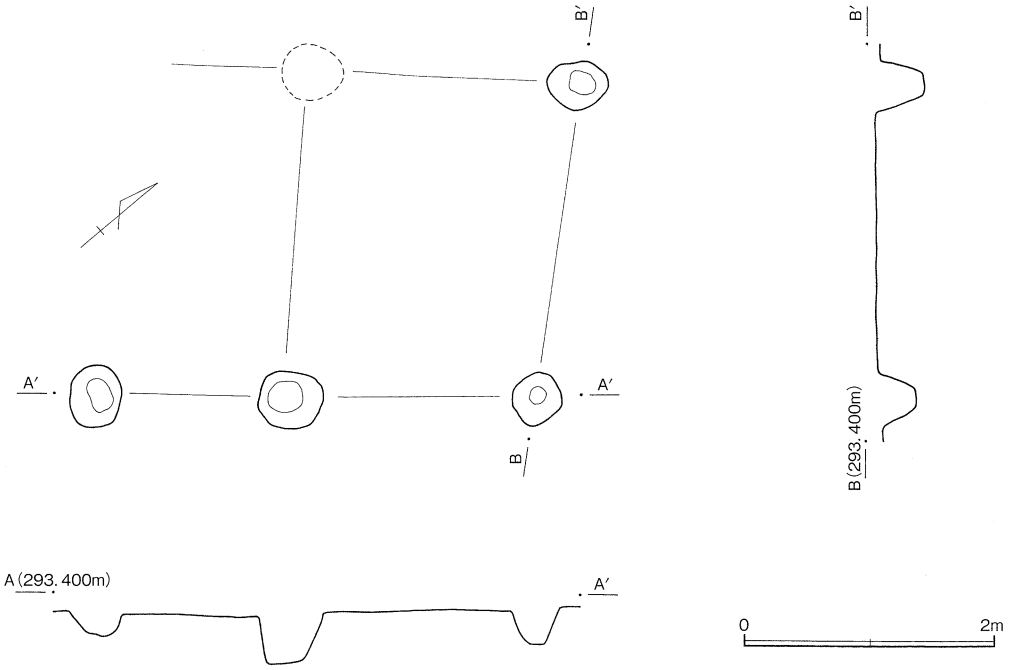
第２トレンチのC-5･D-5グリッドの西壁付近で発見された。東西１間、南北３間で、東西の柱間が2.8m、南北の柱間が1.8mである。調査区境で検出されたため西側に広がっている可能性もある。東側北から三つ目のピットは４号土坑、同じく四つ目のピットは３号土坑に切られている。また、建物中央部には、３号溝状遺構、１号土坑、２号土坑が存在する。これらの遺構と本遺構の新旧関係は不明である。土層の観察から、南西隅以外のピットで柱痕と考えられる層が確認された。小片のため図示できなかったが、東側北から三つ目のピットで土師質土器片が出土している。４号土坑からは17世紀後半以降の瀬戸・美濃の碗や同時期の肥前の碗が出土しているので、それ以前の遺構と考えられる。

２号掘立柱建物（第７図）

第２トレンチB-5グリッドで検出されている。この遺構は、整理作業時に確認されたものである。東西２間、南北１間で、東西列の中央部の柱はやや東よりにずれている。南北の柱間は2.6mである。また、東側が調査区との境のため、東側に広がっている可能性もある。北側中央部にはピットは検出されていないが、穴の深さが浅かったため、削平された可能性も考えられる。重複している遺構はない。また、遺物も確認されていない。そのため、詳しい時期は不明である。



第６図　１号掘立柱建物

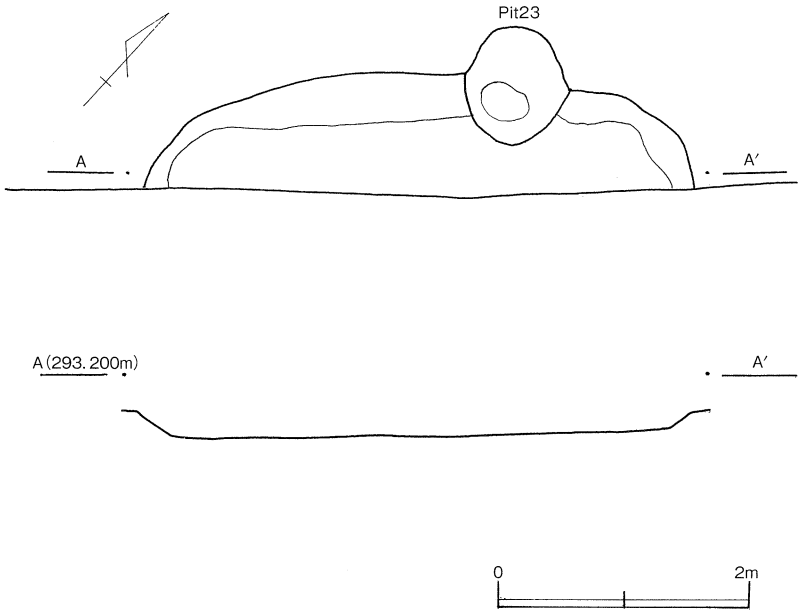


第７図　２号掘立柱建物

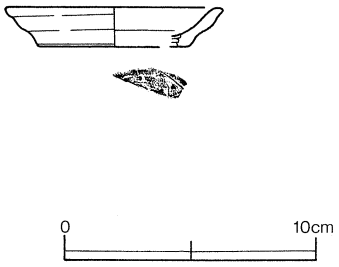
第２節　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第８・９図）

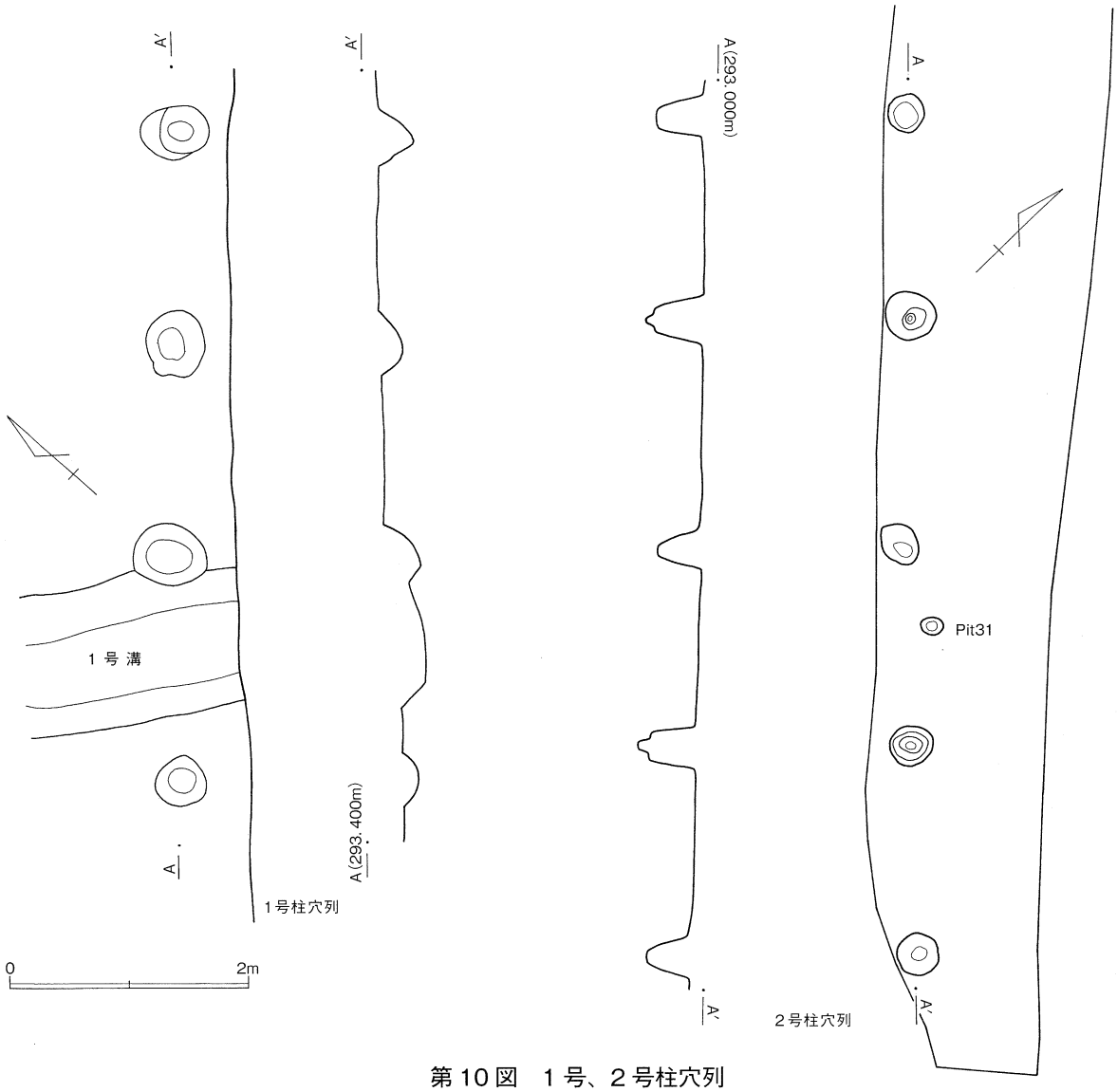
第２トレンチ B-4 グリッドで確認している。東側には、２号掘立柱建物が存在する。東西 2.1m、南側は調査区外にあるため不明である。深さは遺構確認面から約 10cm であり、調査区境のセクションでは約 35cm を測る。覆土は、暗灰黄色土であった。北壁からピット 23 を検出している。ピット 23 は土層を確認できなかったが１号竪穴状遺構よりも古い遺構と考えられる。遺物は、調査区境中央部で覆土中上層から 15 世紀代のかわらけが出土している。ロクロ成形され、褐灰色を呈しており、金属の融解物が付着している。



第８図　１号竪穴状遺構



第９図　１号竪穴状出土遺物

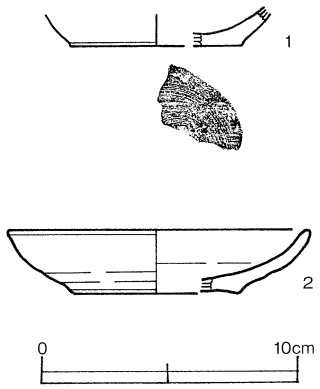


第10図　1号、2号柱穴列

第3節　柱穴列

1号柱穴列（第10·11図）

第2トレンチB-2·C-2グリッドで見つかっている。東西方向3間の柱穴列で、ピット間が約1.8mである。覆土は、いずれのピットも暗灰黄褐色の土であった。それぞれのピットの深度はそれほど深くない。1号溝状遺構に西から二つ目のピットが切られている。調査区外にこの遺構に伴う柱穴列が存在する可能性がある。遺物は、第11図1の16世紀のかわらけが、東から二つ目のピットの覆土中から出土している。



第11図　柱穴列出土遺物

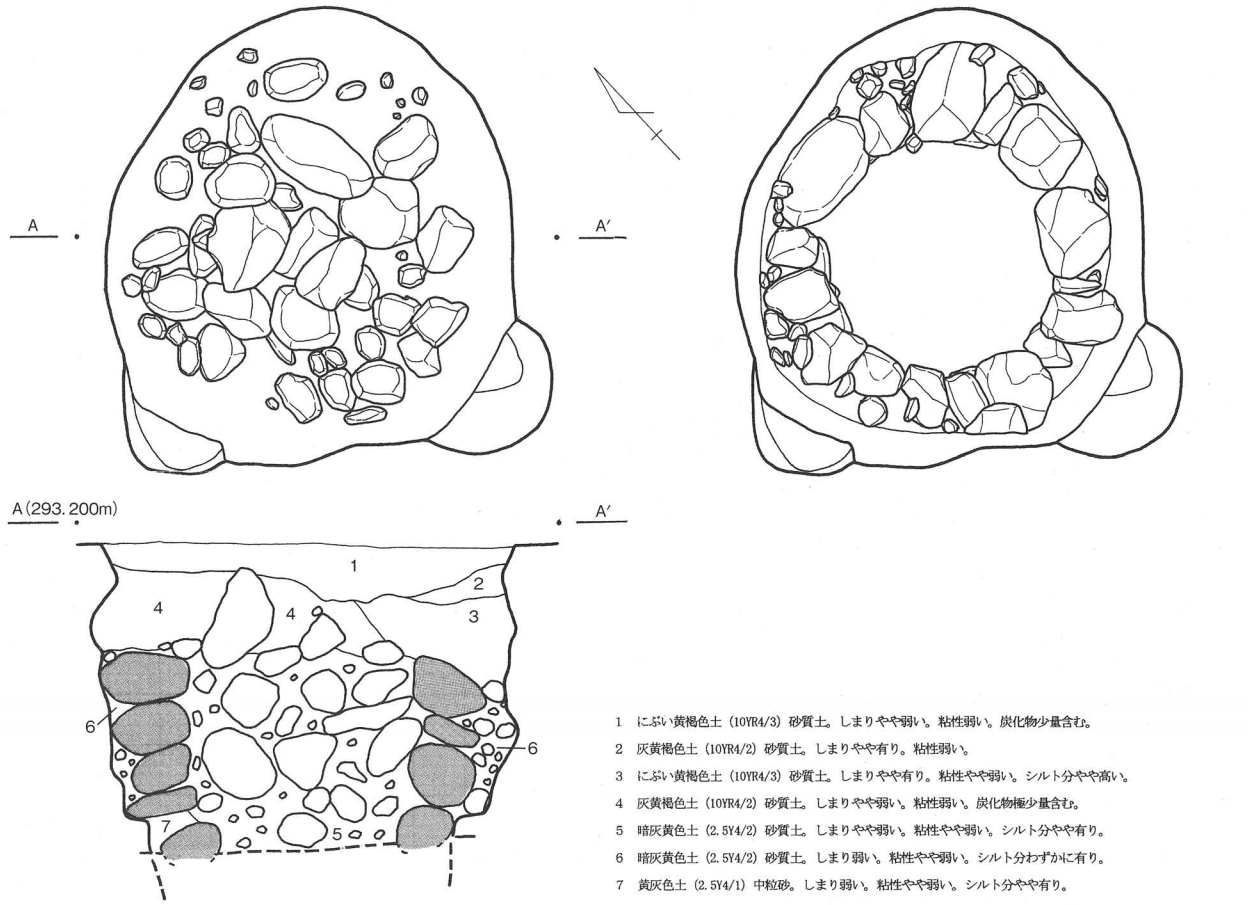
2号柱穴列（第10·11図）

第4トレンチ南東隅で確認されている。東西方向4間の柱穴列で、ピット間が約1.8mである。覆土は、いずれのピットも暗灰黄褐色土であった。ピットの深度は比較的深い。重複関係はない。遺物は、第11図2のかわらけが西から二つ目のピットの覆土中から出土している。15世紀のかわらけで、このトレンチ表土内から出土した破片と接合している。

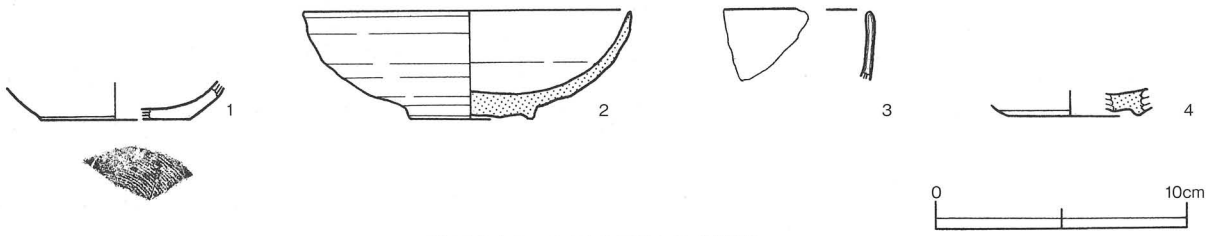
第4節　井戸跡

1号井戸跡（第12･13図）

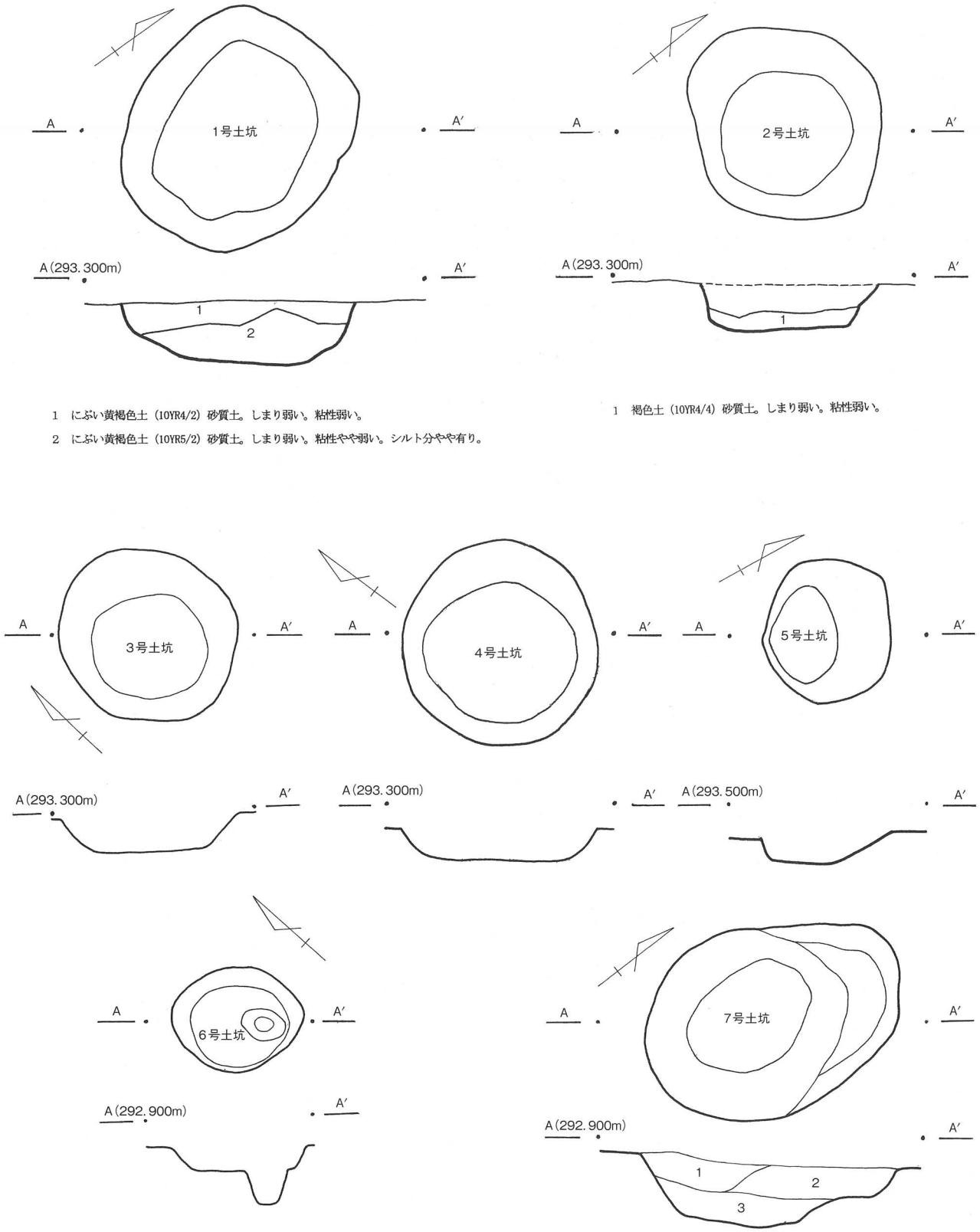
第2トレンチA-1グリッドで発見された。長軸1.8m、短軸1.6mの規模の井戸である。深さ約50cm以下には掘型の周囲に何段かに石が積まれており、石を積んで井戸の枠を構築したものと考えられる。覆土は灰黄褐色土で、深さが増すと粘性が強くなり、礫を多く含んでいた。最下層部までは、危険が伴うため掘ることができなかった。遺物は、第13図1は、16世紀のかわらけの底部である。2は瀬戸・美濃系の陶器の碗である。3は産地不明の陶器である。4は16世紀の瀬戸・美濃系の陶器の底部で、器種は不明である。他に小片で図示できなかったが、上層から時期不明の磁器や17世紀末～18世紀の瀬戸・美濃の陶器が出土している。17世紀末から18世紀初頭ぐらいまでは機能していた井戸だと考えられる。



第12図　1号井戸跡



第13図　1号井戸跡出土遺物



1　にぶい黄褐色土（10YR4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。

2　にぶい黄褐色土（10YR5/2）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

1　褐色土（10YR4/4）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。

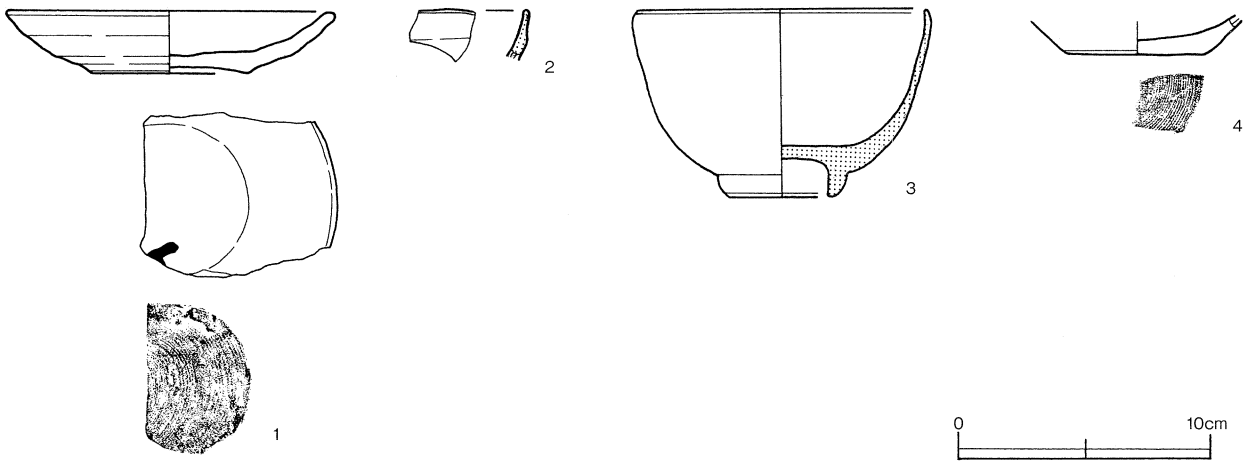
1　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

2　暗灰黄色土～黄灰色土（2.5YR4/2～1）砂質土。しまりやや有り。粘性やや有り。シルト分やや有り。

3　暗灰黄色土～黄灰色土（2.5YR4/2～1）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

0　1m

第14図　土坑



第15図　土坑出土遺物

第5節　土坑

1号土坑（第14図）

第2トレンチC-5グリッドで発見されている。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ約30cmの隅丸方形に近い形状をしている。覆土は、にぶい黄褐色土である。この土坑は3号溝状遺構を切っているので3号溝よりも新しい。

2号土坑（第14･15図）

第2トレンチC-5グリッドの1号土坑北側から検出されている。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ25cmの不整円形の土坑である。上部は掘りすぎてしまい、土層を確認できなかったが、底部は褐色土であった。この土坑も3号溝状遺構を切っている。遺物は、第15図1が上層から出土している。褐灰色の15世紀のかわらけである。底部に墨書がある。

3号土坑（第14図）

第2トレンチD-5グリッドの1号掘立柱建物の北東隅で検出されている。径90cm、深さ10cmの隅丸方形の形状を呈している。黄褐色土で覆われていた。1号掘立柱建物の北東隅のピットを壊している。小片のため図示できなかったが、かわらけが2点出土している。

4号土坑（第14･15図）

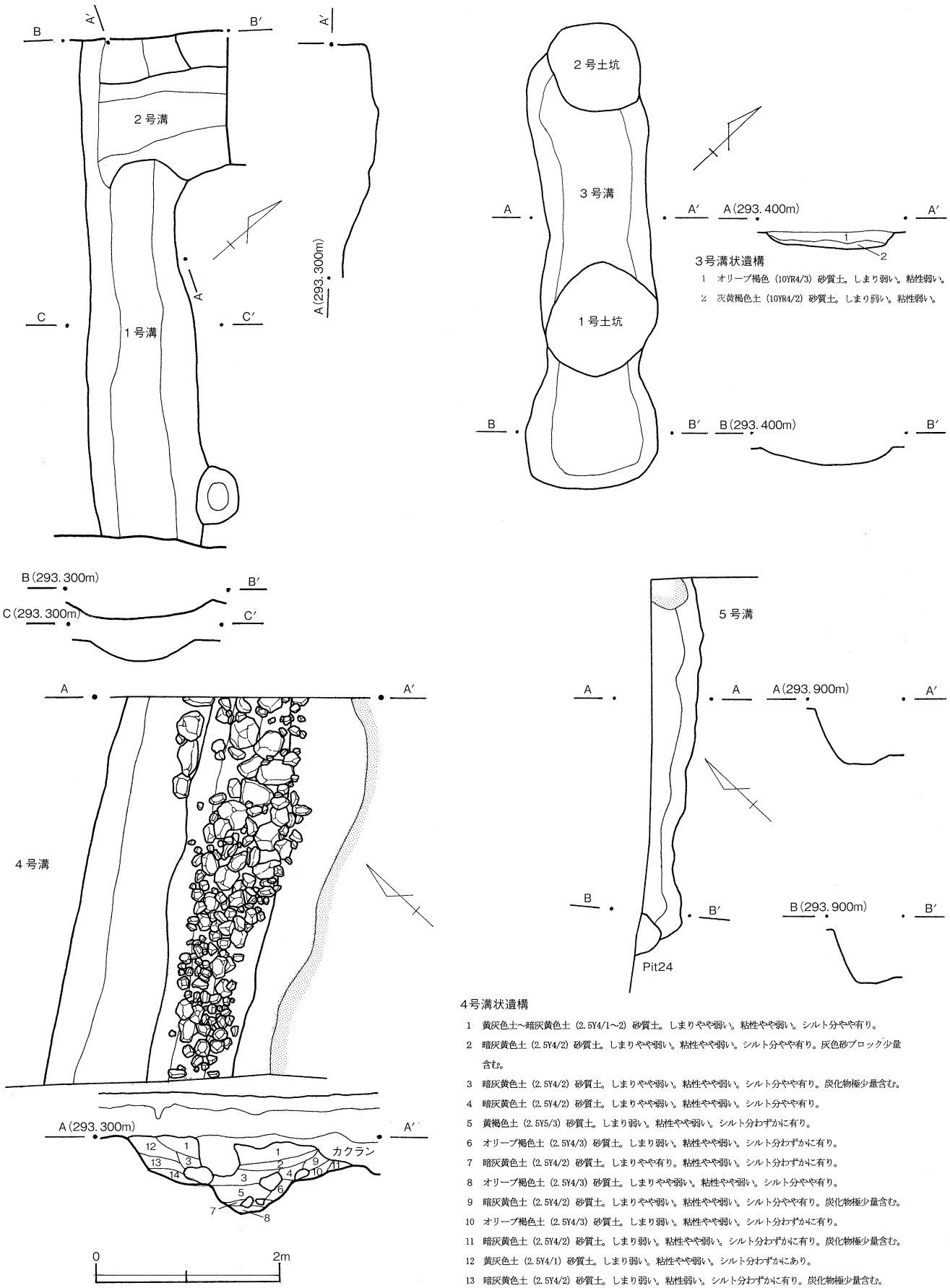
第2トレンチC-5グリッド、3号土坑の北側で確認している。長軸1.1m、短軸1.0m、深さ15cmのほぼ円形の土坑である。覆土は黄褐色土であった。1号掘立柱建物の北側の東から2つ目のピットを切っていた。1号掘立柱建物よりも新しい土坑である。遺物は第15図2･3が出土している。2は､16世紀の瀬戸･美濃の陶器の碗の口縁である。3は、17世紀後半の肥前系の陶器の碗である。他に小片で図示できなかったが、かわらけの破片が出土している。

5号土坑（第14図）

第2トレンチC-5･C-6グリッド、4号土坑の北東から検出されている。長軸75cm、短軸65cm、深さ20cmの楕円形を呈している。覆土は灰黄褐色土であった。重複関係、出土遺物はともになかった。

6号土坑（第14図）

第4トレンチ中央やや東よりで確認している。長軸70cm、短軸60cmの楕円形を呈している。土坑は、



3号溝状遺構

1　オリーブ褐色（10YR4/3）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。

2　灰黄褐色土（10YR4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。

4号溝状遺構

1　黄灰色土～暗灰黄色土（2.5Y4/1～2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

2　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。灰色砂ブロック少量含む。

3　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。炭化物極少量含む。

4　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

5　黄褐色土（2.5Y5/3）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分わずかに有り。

6　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分わずかに有り。

7　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。シルト分わずかに有り。

8　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

9　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。炭化物極少量含む。

10　オリーブ褐色土（2.5Y4/3）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分わずかに有り。

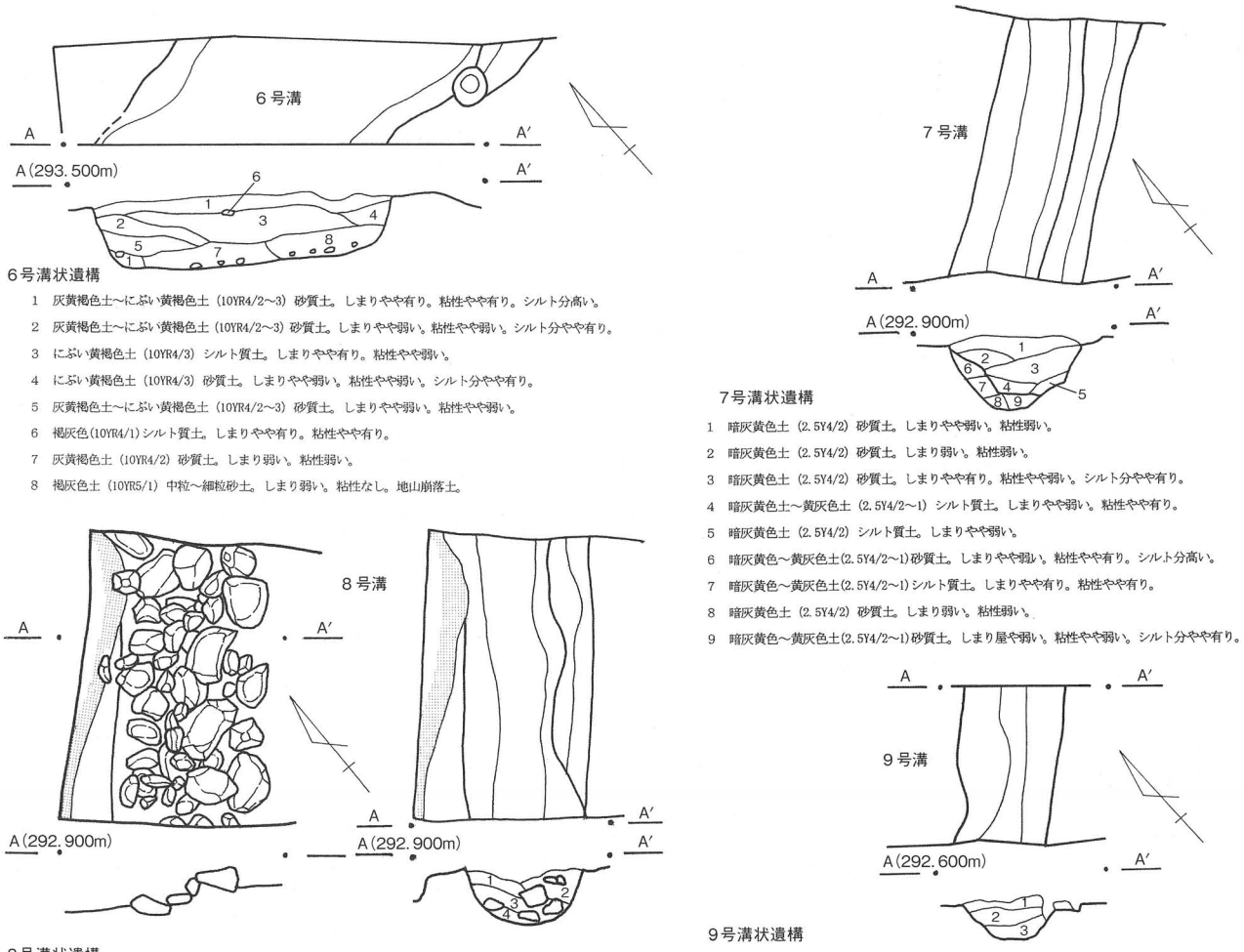
11　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分わずかに有り。炭化物極少量含む。

12　黄灰色土（2.5Y4/1）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分わずかにあり。

13　暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。シルト分わずかに有り。炭化物極少量含む。

14　黄灰色土（2.5Y4/1）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。

第16図　溝状遺構（1）



6号溝状遺構

1 灰黄褐色土～にぶい黄褐色土（10YR4/2～3）砂質土。しまりやや有り。粘性やや有り。シルト分高い。
2 灰黄褐色土～にぶい黄褐色土（10YR4/2～3）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。
3 にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。
4 にぶい黄褐色土（10YR4/3）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。
5 灰黄褐色土～にぶい黄褐色土（10YR4/2～3）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
6 褐灰色(10YR4/1)シルト質土。しまりやや有り。粘性やや有り。
7 灰黄褐色土（10YR4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。
8 褐灰色土（10YR5/1）中粒～細粒砂土。しまり弱い。粘性なし。地山崩落土。

7号溝状遺構

1 暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや弱い。粘性弱い。
2 暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。
3 暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。シルト分やや有り。
4 暗灰黄色土～黄灰色土（2.5Y4/2～1）シルト質土。しまりやや弱い。粘性やや有り。
5 暗灰黄色土（2.5Y4/2）シルト質土。しまりやや弱い。
6 暗灰黄色～黄灰色土(2.5Y4/2～1)砂質土。しまりやや弱い。粘性やや有り。シルト分高い。
7 暗灰黄色～黄灰色土(2.5Y4/2～1)シルト質土。しまりやや有り。粘性やや有り。
8 暗灰黄色土（2.5Y4/2）砂質土。しまり弱い。粘性弱い。
9 暗灰黄色～黄灰色土(2.5Y4/2～1)砂質土。しまり屋や弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

8号溝状遺構

1 にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト質土。しまりやや有り。粘性やや有り。
2 暗灰黄色土～オリーブ褐色土（2.5Y4/2～3）シルト質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。
3 暗灰黄色土（2.5Y4/2）シルト質土。しまりやや有り。粘性やや弱い。
4 黄灰色土～暗灰黄色土（2.5Y4/1～2）シルト質土。しまりやや有り。粘性やや有り。

9号溝状遺構

1 黄灰色土（2.5Y4/1）細砂土。しまり弱い。粘性なし。
2 オリーブ褐色土（2.5Y4/3）砂質土。しまり弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。
3 オリーブ褐色土～暗灰黄色土（2.5Y4/3～2）砂質土。しまりやや弱い。粘性やや弱い。シルト分やや有り。

第17図　溝状遺構（2）

深さ約15cmでテラスがあり、底部北東側でさらに20cm落ち込んでいる。重複関係はなく、遺物は小片のため図示できなかったが、近世の瀬戸・美濃産の鉄釉の陶器片が出土している。

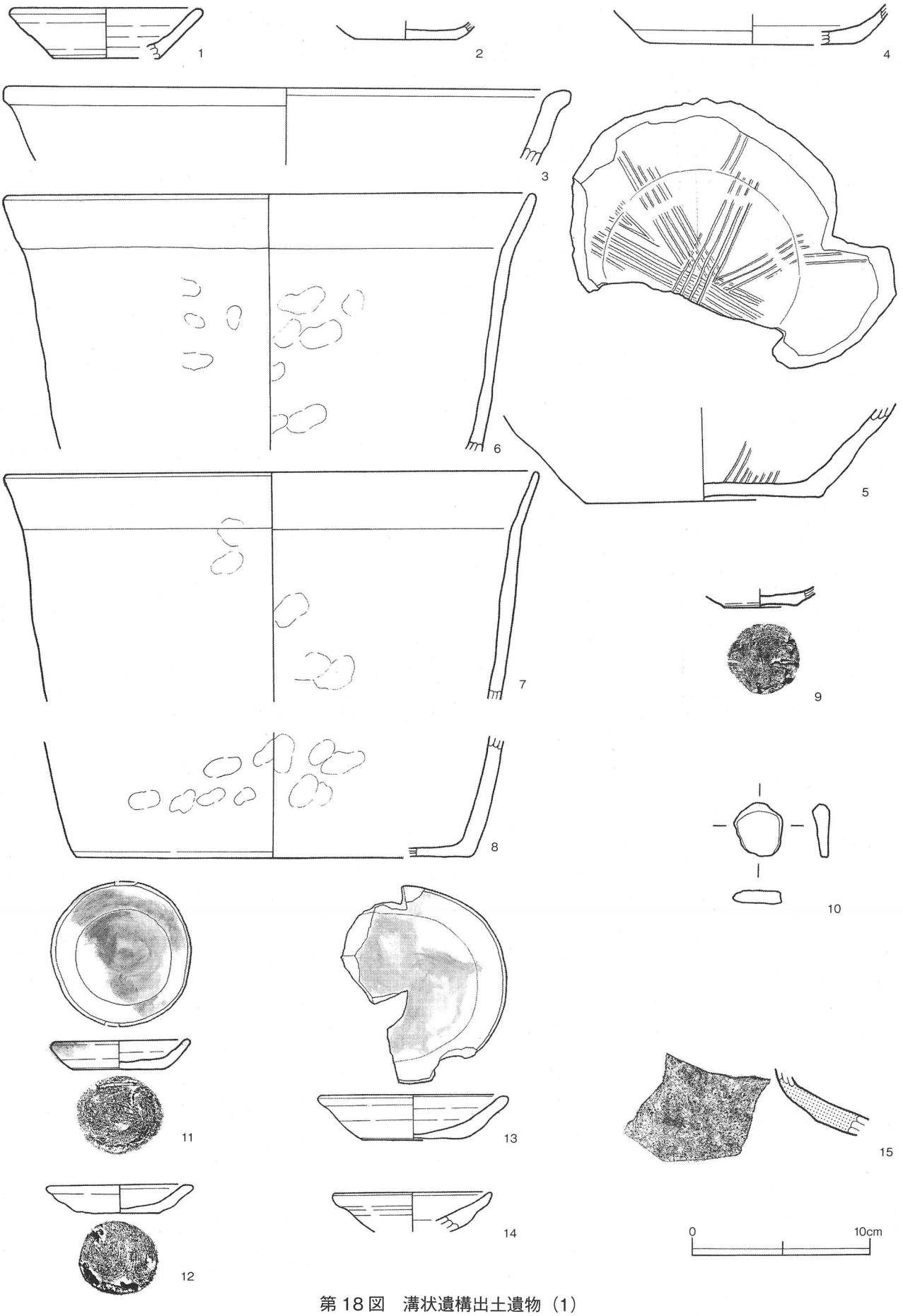
7号土坑（第14･15図）

第4トレンチ西側で発見された遺構である。長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形を呈していた。底部に北側に巾20cmのテラスがあり、その南側はさらに落ち込んでいる。覆土は、暗灰黄色土であった。重複関係はなし。遺物が第15図4が出土しており､16世紀のかわらけである。他に小片のため図示できなかったが、かわらけの破片が数点出土している。

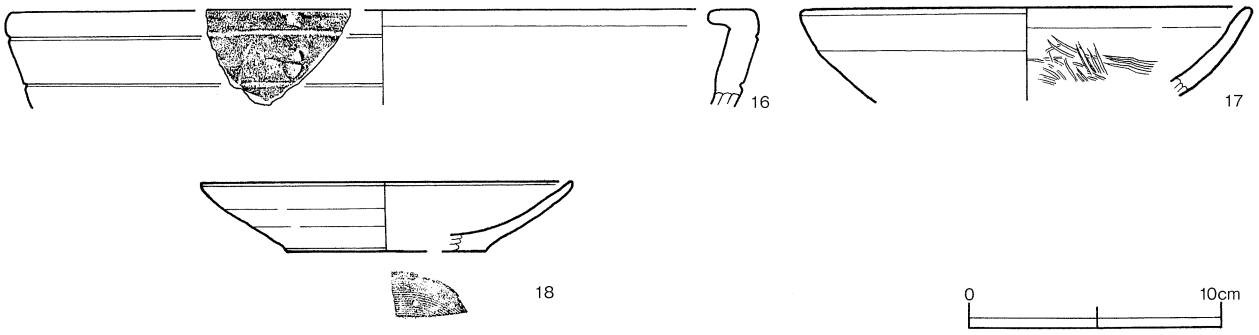
第6節　溝状遺構

1号溝状遺構（第16･18図）

第2トレンチA-2･3･B-2･3グリッドで検出された。巾1.1m、深さ20cm、長さは調査区外まで延びるので不明である。検出できたのは約4mである。覆土は主に灰黄褐色土であった。当遺構の北側は、2号溝状遺構によって壊されている。また、南の調査区の境近くに1号柱穴列に伴うピットを切っている。遺物は比較的多く出土している。第18図1と2は16世紀のかわらけである。3と4は土師質の鉢である。3



第18図　溝状遺構出土遺物（1）



第19図　溝状遺構出土遺物（2）

は15世紀のものである。5は土師質の擂鉢で、時期は15～16世紀が想定される。6～8は内耳土器である。7と8は同一個体の可能性がある。他に小片のため図示できなかったが、ほとんどの遺物が16世紀のものなので、この遺構は、16世紀に機能していたと思われる。

2号溝状遺構（第16図）

第2トレンチA-3グリッドで検出された。1号溝状遺構を壊している。巾1.1m、深さ約30cmで、長さは、東側については調査区の外へ延びており、西側も1号不明遺構によって壊されているため不明である。1号溝状遺構よりも新しいものと判断される。暗灰黄色土が覆土であった。遺物は、土師質土器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

3号溝状遺構（第16･18図）

第2トレンチC-5グリッド、1号掘立柱建物の内部で検出された。長さ5.1m、巾1.4m、深さ20cmであった。覆土は砂質の灰黄褐色土であった。上層は、1号土坑、2号土坑に切られている。遺物は、第18図9、10が出土している。9はかわらけの底部で、灰褐色を呈している。10は土製品で、かわらけの底部の転用品である。

4号溝状遺構（第16･18･19図）

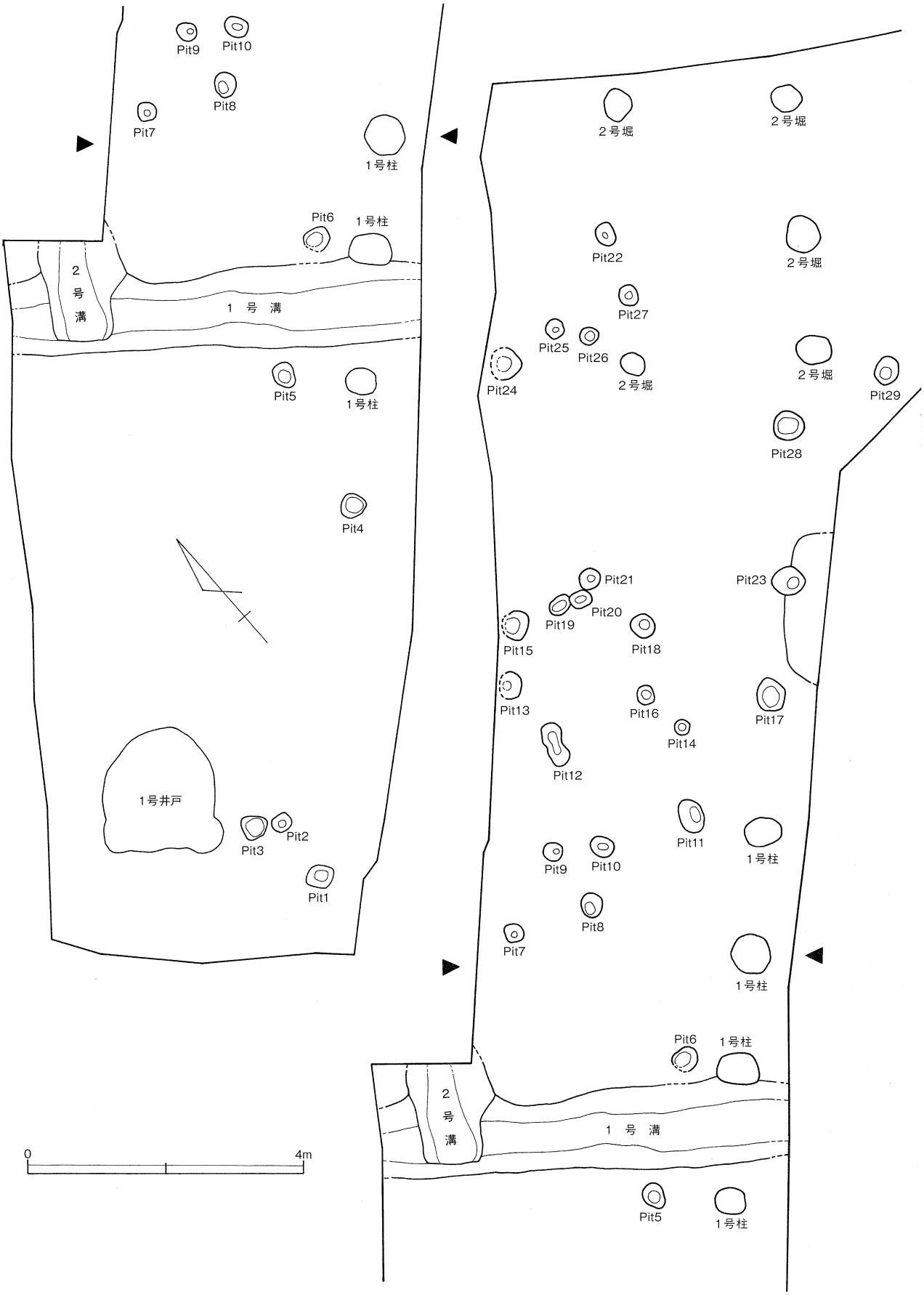
第2トレンチD-5･6で検出されている。1号掘立柱建物より東側に位置する。遺構の東側は撹乱を受けている。検出された範囲で巾2.0 m、深さ90cmであり、長さは両端ともに調査区外へ延びているため不明である。底部西側に巾70cmほどのテラスがあり、テラスの東側は落ち込んだ状態となっている。覆土は主に灰黄色土の砂質土であった。カクランの他には、遺構の重複はなかった。遺物は、第18図11～第19図16が出土している。11～14までかわらけで、11と12は完形品で16世紀中ごろの遺物である。また、11と13は煤が付いており、灯明皿に使われたものであろう。15は常滑の甕である。第19図16は土師質の火鉢である。他に図示できなかったが内耳の破片なども出土している。16世紀中ごろの遺構であろう。

5号溝状遺構（第16図）

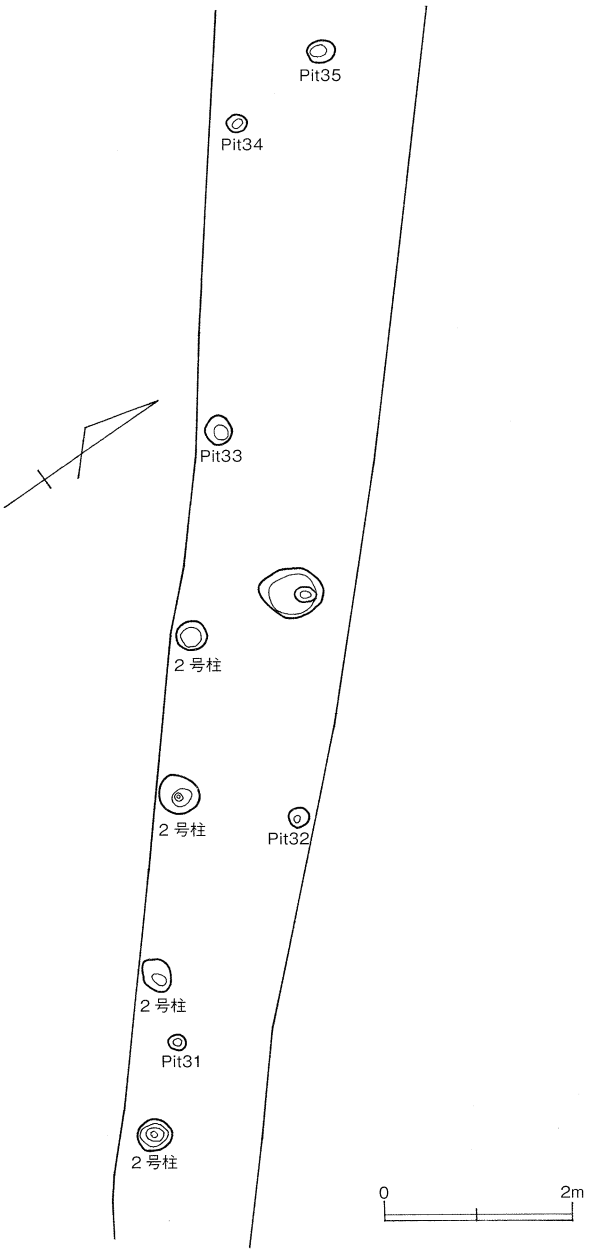
第2トレンチB-5グリッドの北壁で検出されている。西端はピットが壁を壊している。規模は調査区境で検出されたために不明である。遺構の形状は溝状を呈するが、元来はくぼんでいる自然地形で、そこへ整地するために土を入れた遺構の可能性もある。遺物は、かわらけ片などの土師質土器が出土している。

6号溝状遺構（第17･19図）

第3トレンチで検出されている。長さは両端ともに調査区外へ延びているため不明で、巾3.0m、深さ約30cmの規模である。重複関係はない。灰黄色の土で覆われていた。遺物は、第19図17が出土している。16世紀のかわらけである。外面には煤が付着している。他に土師質土器がわずかに出土している。



第20図　ピット群詳細図（1）



第21図　ピット群詳細図（2）

7号溝状遺構（第17･19図）

第4トレンチ西端で検出されている。1回掘り直されているものと土層観察から判断され、少し東側へ作り直されている。図の左側が古い遺構で、右側が新しいものである。長さは、両端ともに調査区外にあるために不明であるが、古い方、新しい方ともに巾70cmである。覆土は、暗灰黄色土が主であった。遺物は、第19図18のかわらけが出土している。他には図示できなかったが、内耳片、鉢の破片が出土している。

8号溝状遺構（第17図）

第4トレンチ西端、7号溝状遺構の西で検出されている。長さは両端が調査区外に延びているため不明で、巾90cm、深さ40cmほどの規模である。暗灰黄色土の土で覆われていた。遺構の重複はない。遺物は小片のため図示できなかったが、かわらけ片が出土している。

9号溝状遺構（第17図）

第6トレンチ東端で検出されている。規模は、長さは両端が調査区外に延びているため不明で、巾90cm、深さ30cmである。オリーブ褐色、灰黄色などの土で覆われていた。遺構の重複はない。遺物は小片のため図示できなかったが、土師質土器の破片が出土している。

第7節　ピット群（第20･21図）

掘立柱建物と柱穴列にならなかったピットについては、第20・21図で図示しておく。また、規模などについては、第1表にまとめてある。

第1表　ピット一覧表

遺構番号	位置	平面形	規模（cm）		重複関係	備考
			大きさ（長径×短径）	深さ		
Pit1	2トレンチ	隅丸方形	43 × 35	25		
Pit2	2トレンチ	不整円形	29 × 27	15		
Pit3	2トレンチ	不整形	40 × 36	28		
Pit4	2トレンチ	不整円形	39 × 35	10		
Pit5	2トレンチ	楕円形	36 × 30	8	1号不明遺構	
Pit6	2トレンチ	—	35 ×—	13		
Pit7	2トレンチ	隅丸方形	40 × 30	15		
Pit8	2トレンチ	楕円形	47 × 43	37		
Pit9	2トレンチ	円形	40 × 38	24		
Pit10	2トレンチ	楕円形	45 × 31	18		
Pit11	2トレンチ	楕円形	54 × 46	30		かわらけ出土
Pit12	2トレンチ	不整形	66 × 40	23		
Pit13	2トレンチ	—	47 ×—	37		

遺構番号	位置	平面形	規模（cm）		重複関係	備考
			大きさ（長径×短径）	深さ		
Pit14	2トレンチ	円形	25 × 25	12		
Pit15	2トレンチ	—	40 ×—	32		
Pit16	2トレンチ	楕円形	30 × 26	13		
Pit17	2トレンチ	不整円形	49 × 40	35		
Pit18	2トレンチ	—	45 ×—	12		
Pit19	2トレンチ	楕円形	35 × 26	14		
Pit20	2トレンチ	楕円形	33 × 27	12		
Pit21	2トレンチ	円形	31 × 31	25		
Pit22	2トレンチ	楕円形	40 × 35	27		
Pit23	2トレンチ	楕円形	50 × 41	39		
Pit24	2トレンチ	—	48 ×—	35		土師質土器出土
Pit25	2トレンチ	不整円形	30 × 26	16		
Pit26	2トレンチ	楕円形	30 × 25	6		
Pit27	2トレンチ	不整円形	30 × 28	11		
Pit28	2トレンチ	円形	45 × 43	18		
Pit29	2トレンチ	楕円形	41 × 35	30		
Pit30	3トレンチ	円形	26 × 26	16		
Pit31	4トレンチ	楕円形	20 × 15	20		
Pit32	4トレンチ	不整円形	35 × 20	21		
Pit33	4トレンチ	楕円形	35 × 29	23		
Pit34	4トレンチ	円形	25 × 23	10		
Pit35	4トレンチ	楕円形	34 × 27	13		

第8節　不明遺構

1号不明遺構（第22･23図）

第2トレンチA-2グリッドで検出された。1号溝状遺構の西側に位置する。不整形の浅い掘り込みである。この掘り込みは、1号溝状遺構と2号溝状遺構により止められている。この遺構南側の1号溝状遺構寄りに1基ピットが検出されている。また、遺構の南側は、一部カクランによって壊されている。覆土は褐色土であった。この遺構は、元来窪地であった場所に土を入れた整地した跡と考えられる。出土遺物は、第23図1がかわらけである。2は、仏飯具の足である。近世の遺物が出土しているので、江戸時代のものであろう。

2号不明遺構（第24･25図）

第2トレンチE-5･F-5グリッドで検出された。遺構東端と南端は調査区外となっており、北側はカクランをうけていた。遺物は、第25図1と3は17世紀後半頃の肥前の陶器碗で、2は同時期の唐津の刷毛目碗である。4は瀬戸・美濃産の鉄釉の陶器である。5は瀬戸産の瓦質の擂鉢である。江戸時代前期のごみ穴と考えられる。

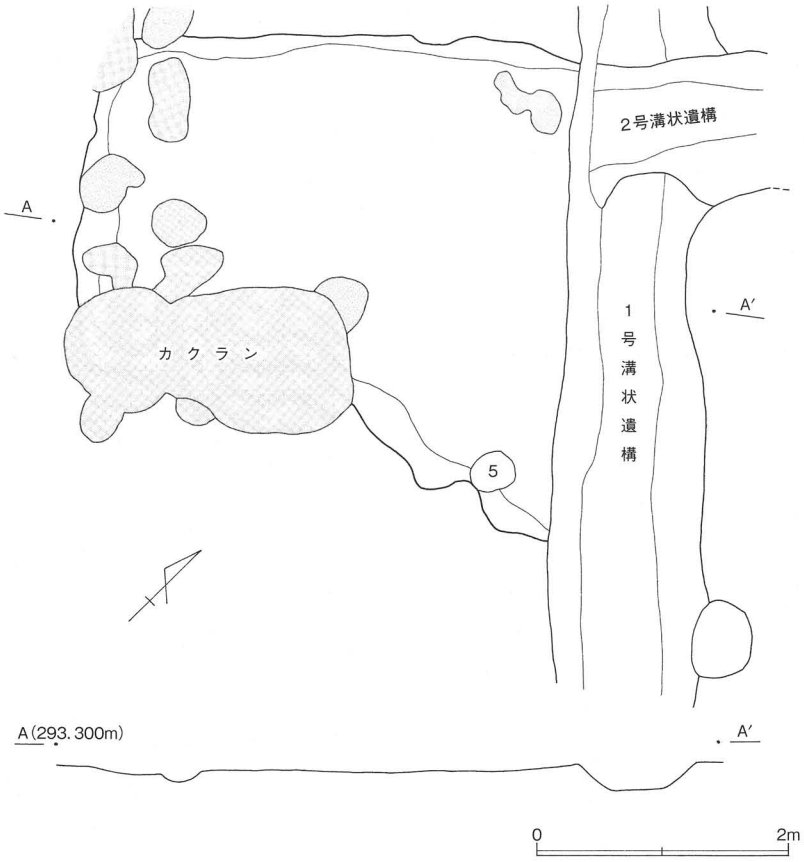
第9節　遺構外遺物（第26･27図）

第26図1は16世紀中頃のかわらけで、5号溝状遺構周辺から出土している。2は第1トレンチ中央部から出土しているかわらけで、16世紀のものと思われる。3は初山窯の皿。大窯期のもので、第4トレンチの7号溝状遺構の周辺から出土している。4は志野の碗の口縁部である。5は美濃産の陶器で、内側に鉄釉がかけられている。第2トレンチの南端のカクラン内から出土している。

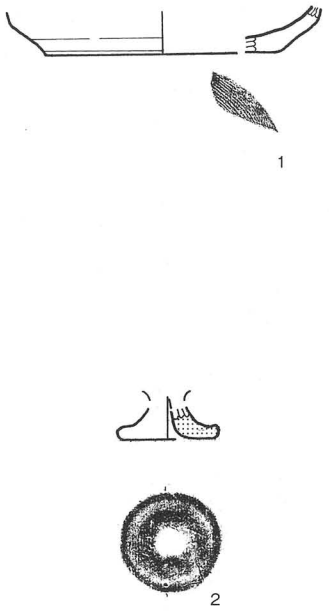
6と7は擂鉢で、6は15世紀から16世紀頃の片口がついた土師質の擂鉢で灰色を呈している。8は内耳土器の破片で、耳の部分であるが、耳は欠けている。

9は青磁の碗の破片である。10は16世紀の白磁の皿の口縁部である。11は明の染付の皿の破片で、第2トレンチ4号溝状遺構周辺で出土している。

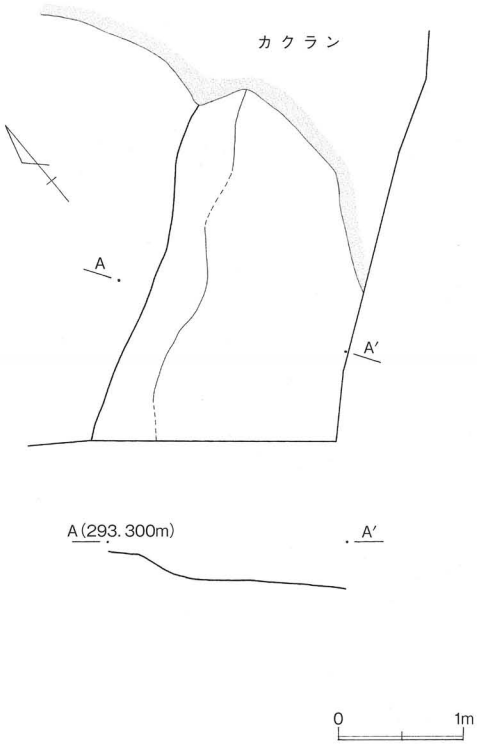
12はかわらけで17世紀の所産と考えられる。13～16は陶器の碗である。14は肥前の陶器で、第26図1、3と同じ製品である。15と16は美濃産で、15は17世紀後半から18世紀前半にかけての所産である。17



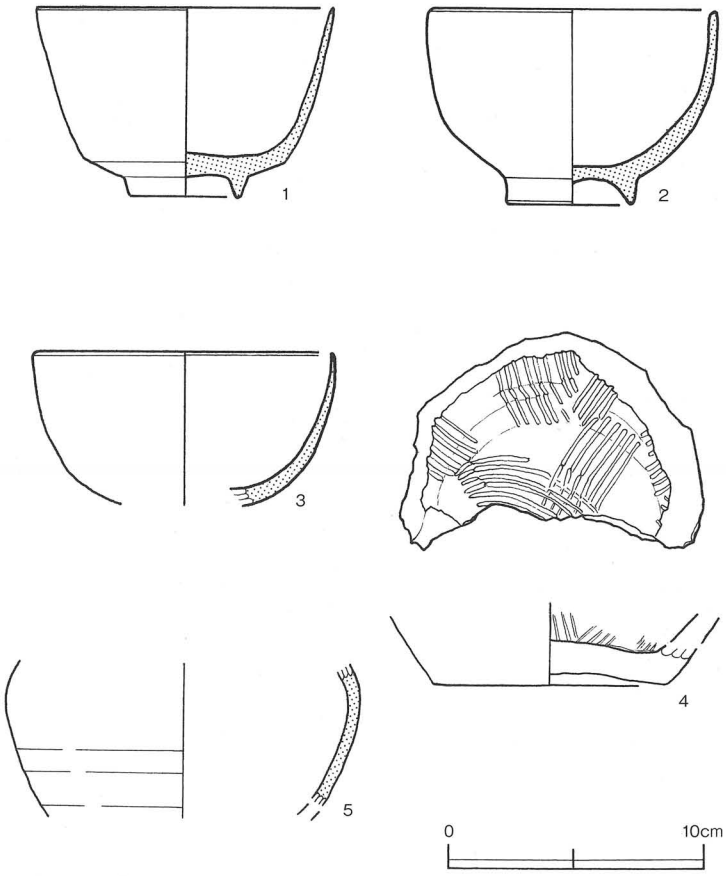
第22図　1号不明遺構



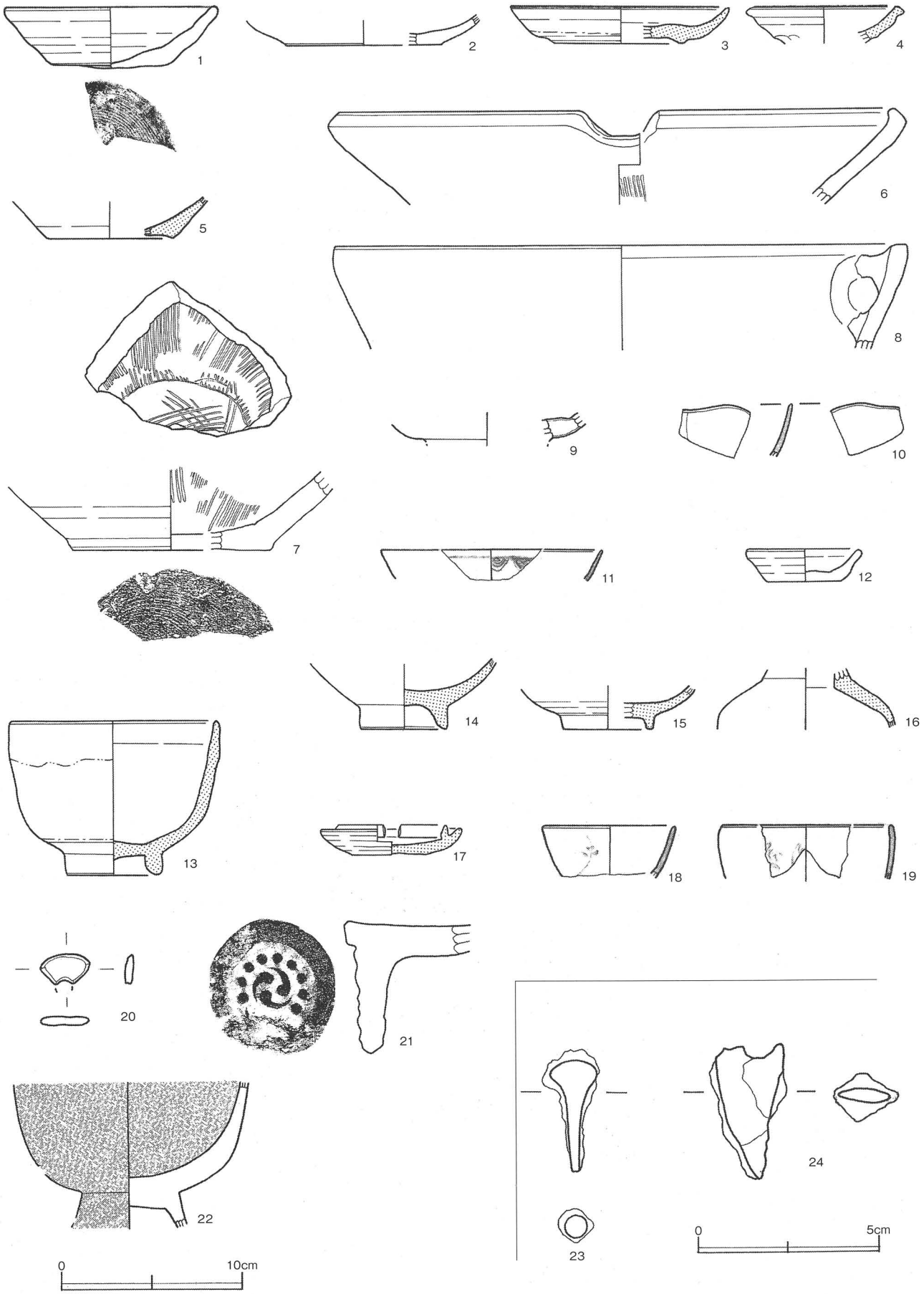
第23図　1号不明遺構出土遺物



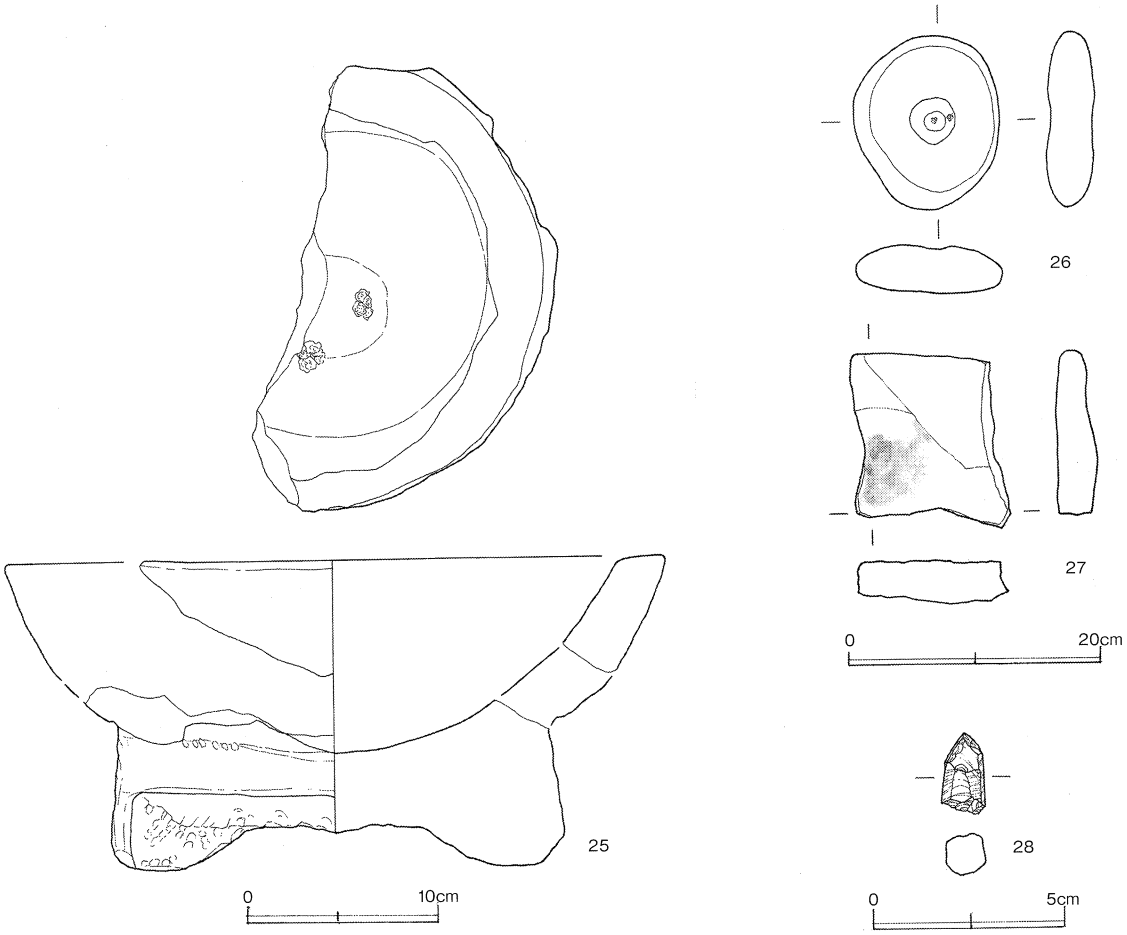
第24図　2号不明遺構



第25図　不明遺構状出土遺物



第26図　遺構外遺物（1）



第27図　遺構外遺物（2）

は陶器の灯明受皿である。18と19は肥前系の染付の碗で、18世紀以降のものである。

20は円盤状で中央に穴があけられている土製品である。21は桟瓦である。22は椀で試掘調査時に出土している。23は鉄製品の釘であり、24は鉄族である。

第27図25は石製品の鉢である。26は中央に窪みのある凹石である。27は煤が付着しており、何かの台に使用されたものと考えられる。28は水晶である。

第2表　土器類観察表

図版番号	番号	出土位置	器種	法量(cm)			推定産地	色調	焼成	時期	備考
				口径	器高	底径					
9	1	1号竪穴状遺構	土器・かわらけ	(8.8)	(1.6)	(6.0)	在地	褐灰色	良好	15 c	タール付着
11	1	1号柱穴列	土器・かわらけ	—	—	(5.9)	在地	橙色	良好	16 c	
11	2	2号柱穴列	土器・かわらけ	(12.0)	2.5	(6.5)	在地	橙色	良好	15 c	表土一括と接合
13	1	1号井戸跡	土器・かわらけ	—	—	(6.0)	在地	浅黄色	良好	16 c	
13	2	1号井戸跡	陶器・碗	13.1	4.3	5.0	瀬戸・美濃	鉄釉	良好	16 c ?	
13	3	1号井戸跡	陶器・碗	—	—	—		灰釉	良好		
13	4	1号井戸跡	陶器・碗	—	—	5.0	瀬戸・美濃	暗褐色	良好		
15	1	2号土坑	土器・かわらけ	(12.8)	2.5	(6.2)	在地	褐灰色	良好	15 c	墨書あり
15	2	4号土坑	陶器・碗	—	—	—	瀬戸・美濃	灰白色	良好		
15	3	4号土坑	陶器・碗	11.5	7.5	4.2	肥前	灰釉	良好	17 c後半～18 c前半	
15	4	7号土坑	土器・かわらけ	—	—	(3.8)	在地	橙色	良好	16 c	
18	1	1号溝状遺構	土器・かわらけ	(10.6)	(2.8)	(6.0)	在地	(外)橙 (内)明黄褐色	良好	16 c	
18	2	1号溝状遺構	土器・かわらけ	—	—	(6.0)	在地	橙色	良好	16 c	
18	3	1号溝状遺構	土器・鉢	(32.0)	—	—	在地	(外)明赤褐色 (内)橙	良好	15c	
18	4	1号溝状遺構	土器・鉢	—	—	(11.4)	在地	(外)黒褐色 (内)橙	良好	16c	

図版番号	番号	出土位置	器種	法量(cm)			推定産地	色調	焼成	時期	備考
				口径	器高	底径					
18	5	1号溝状遺構	土器・擂鉢	—	—	13.0	在地	橙色	良好	15～16 c	
18	6	1号溝状遺構	土器・内耳	(30.0)	—	—	在地	(外)黒褐色 (内)橙～褐灰色	良好	15c	煤付着
18	7	1号溝状遺構	土器・内耳	(29.6)	—	—	在地	(外)黒色～橙色 (内)赤褐色～褐灰色	良好	15 c	煤付着
18	8	1号溝状遺構	土器・内耳	—	—	(22.0)	在地	(外)黒色～赤褐色 (内)灰褐色～赤褐色	良好		煤付着
18	9	3号溝状遺構	土器・かわらけ	—	—	(5.9)	在地	灰色	良好	15c ?	
18	10	3号溝状遺構	土製品	—	0.7	—	在地	にぶい黄橙色	良好		かわらけを転用
18	11	4号溝状遺構	土器・灯明皿	7.8	1.5	5.2	在地	(外)黒色～にぶい黄橙色 (外)褐灰色～橙	良好	16c	煤付着
18	12	4号溝状遺構	土器・かわらけ	8.4	1.5	4.2	在地	灰色	良好	16c	
18	13	4号溝状遺構	土器・灯明皿	(10.8)	2.5	5.0	在地	(外)灰褐色～黒褐色 (内)黒色	良好	16c	煤付着
18	14	4号溝状遺構	土器・かわらけ	(9.0)	—	—	在地	橙色	良好	16c	
18	15	4号溝状遺構	陶器・甕	—	—	—	常滑	(外)にぶい赤褐色 (内)灰褐色	良好		
19	16	4号溝状遺構	土器・鉢	(30.0)	—	—	在地	橙色	良好	15 c	菊花紋あり
19	17	6号溝状遺構	土器・かわらけ	(18.0)	—	—	在地	(外)黒褐色～橙色 (内)橙色	良好		調整した線刻あり
19	18	7号溝状遺構	土器・かわらけ	(17.8)	2.7	(4.2)	在地	灰白色	良好	16c	
23	1	1号不明遺構	土器・かわらけ	—	—	(9.3)	在地	橙色	良好	16c	
23	2	1号不明遺構	陶器・仏飯器	—	—	4.0	?	灰釉	良好	18c 以降	
25	1	2号不明遺構	陶器・碗	11.5	7.7	5.0	肥前	灰釉	良好	17 c 後半～18 c 前半	呉器手碗
25	2	2号不明遺構	陶器・碗	(11.8)	7.5	(4.4)	唐津	刷毛目	良好	17 c 後半～18 c 前半	
25	3	2号不明遺構	陶器・碗	12.0	—	—	肥前	灰釉	良好	17 c 後半～18 c 前半	呉器手碗
25	4	2号不明遺構	陶器・?	—	—	—	瀬戸・美濃	鉄釉	良好	?	
25	5	2号不明遺構	瓦質土器・擂鉢	—	—	9.2	瀬戸・美濃	鉄釉	良好	?	
26	1	3トレンチ	土器・かわらけ	(9.8)	3.4	(6.5)	在地	橙色	良好	16c	
26	2	1トレンチ	土器・かわらけ	—	—	(8.7)	在地	橙色	良好	16 c	
26	3	4トレンチ	陶器・皿	(12.0)	2.0	(7.2)	初山	鉄釉	良好	16c	
26	4	2トレンチ	陶器・皿	—	—	—	志野	長石釉	良好	17c	
26	5	2トレンチ	陶器・?	—	—	(7.2)	瀬戸・美濃	(外)浅黄色 (内)鉄釉	良好	?	
26	6	5トレンチ	土器・擂鉢	(31.0)	—	—	在地	灰色	良好	15 c～16c	
26	7	1トレンチ	瓦質土器・擂鉢	—	—	(11.0)		鉄釉	良好	?	ロクロ成形
26	8	1トレンチ	土器・内耳	(31.8)	—	—	在地	(外)黒褐色 (内)暗褐色	良好	15 c	
26	9	5トレンチ	磁器・碗	—	—	—		青磁	良好	?	
26	10	2トレンチ	磁器・皿	—	—	—	明	白磁	良好	16c	
26	11	2トレンチ	磁器・皿	(12.2)	—	—	明	染付	良好	16c	
26	12	1トレンチ	土器・かわらけ	6.3	1.8	4.0	在地	(外)にぶい褐色～黒褐色 (内)にぶい褐色	良好	17c	
26	13	2トレンチ	陶器・碗	(11.5)	8.5	(5.5)	瀬戸・美濃	飴釉	良好	17c 後半～18 c 前半	
26	14	2トレンチ	陶器・碗	—	—	—	肥前	灰釉	良好	17c 後半～18 c 前半	
26	15	1トレンチ	陶器・碗	—	—	—	瀬戸・美濃	灰釉	良好	17c 後半～18 c 前半	
26	16	2トレンチ	陶器・壷	—	—	5.0	瀬戸・美濃	緑釉	良好	18c 以降	
26	17	2トレンチ	陶器・灯明受皿	7.8	1.6	4.0		鉄釉	良好	18c 以降	
26	18	1トレンチ	磁器・碗	(7.2)	—	—	肥前	染付	良好	17c 後半～18c 前半	
26	19	2トレンチ	磁器・碗	(9.4)	—	—	肥前	染付	良好	18c 以降	
26	20	2トレンチ	土製円盤	—	—	—			良好		
26	21	1トレンチ	桟瓦	—	—	—		灰色	良好		

第3表　漆器観察表

図版番号	番号	出土位置	種類	法量(cm)			色調	備考
				口径	器高	底径		
26	22	試掘8トレ	漆器・飯椀	—	—	—		

第４表　鉄製品観察表

図版番号	番号	出土位置	種類	法量(cm)			重量(ｇ)	備考
				長さ	幅	厚さ		
26	23	４トレンチ	鉄製品・釘	3.3	1.5	0.9	3.95	
26	24	４トレンチ	鉄製品・鉄族	3.3	2.0	1.3	6.32	

第５表　石製品観察表

図版番号	番号	出土位置	種類	法量(cm)			重量(ｇ)	石材	備考
				口径／全長	器高／全幅	底径／厚さ			
27	25	２トレンチ	石製品・すり鉢	(35.0)	16.5	21.0	2.4kg		
27	26	２トレンチ	石製品・凹石	18.6	15.5	5.6	2.5kg		
27	27	２トレンチ	石製品・台石	17.5	16.5	4.9	2.9kg		煤付着
27	28	２トレンチ	水晶	2.1	2.1	1.0	6.81		

第５章　まとめ

今回の信虎誕生屋敷遺跡の発掘調査は、２度目の調査である。１回目の調査は、平成13年度に山梨県埋蔵文化財センターによって行われた。その調査は、埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査に伴って実施された。本遺跡内で大正年間に戦国時代の甲州金が発見されたため、埋蔵銭がどのような状況で発掘されたかを確認するため、発掘調査がなされた。この地で出土した甲州金は、碁石金や蛭藻金などではなく、三枚の大判形の金貨であった。どうして、当地へ埋められたかは謎であるが、信虎誕生屋敷遺跡、つまり岩下氏の館跡内であるのと、すぐ南は原田氏の館跡という戦国時代の土豪の館跡が並んでいることが要因としてあげられよう。

県の調査は、今回の調査地点の北側約150mの場所を２箇所調査している。１トレンチからは土坑が10基、柱穴８基、溝状遺構１条が確認されている。遺物は、15～16世紀のかわらけが主体である。つまり、信虎誕生屋敷遺跡は、15~16世紀の遺跡であることが判明している。調査所見として、金貨も15~16世紀の遺構面から出土した可能性が高いこと、15~16世紀の信虎誕生屋敷遺跡は、地割溝によって区画された内側に柱穴群が存在すること、遺構が切りあいながら検出しているので、複数の時期に分けられること。しかし、『埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査報告書』において複数の時期と述べるだけで、時期は明確にはなっていない。

今回の調査も調査範囲は狭く、屋敷の想定地内の中心部分から外れた場所であった。屋敷跡のほんの一部分しか掘っていない状況で軽率な結論は出せないが、今回の調査で、次のことがわかった。県の調査と同様に、地割溝によって区画された中に、柱穴群や掘立柱建物などが存在すること、15世紀～18世紀前半まで屋敷が継続して使用されていたことがわかった。

出土遺物の年代観から、15～16世紀に入る頃、16世紀中頃、16世紀末～18世紀前半までの３時期が想定される。15～16世紀に入る頃は、ちょうど武田信虎が誕生する時期と重なる。このときの遺構は明確でないが、１号竪穴状遺構や２号土坑などからは、15世紀代のかわらけが出土している。

今回調査した箇所では、16世紀が中心の時代となる。１号溝状遺構や４号溝状遺構などでは、16世紀の遺物が出土しており、この時期に機能していたと考えられる。１号井戸跡は、16世紀から江戸時代初頭まで使用されたと考えられる。

他に、２号不明遺構は、17世紀後半～18世紀前半の陶磁器が確認されていることから、この時期のごみ穴と考えられる。また、４号土坑からも同時代の遺物が出土している。

そうすると、本遺跡は、県の調査では15~16世紀と位置づけられていたが、今回の調査から、15~18世紀前半ごろまでの遺跡であることが判明した。宝暦13年（1763）には、この地に御三卿の内の一つ、清水家の陣屋が置かれたので、それ以前の遺構が確認されていることになる。

また、少量ではあるが、青磁片や白磁片なども出土している。舶載陶磁器と比較して、かわらけが多く

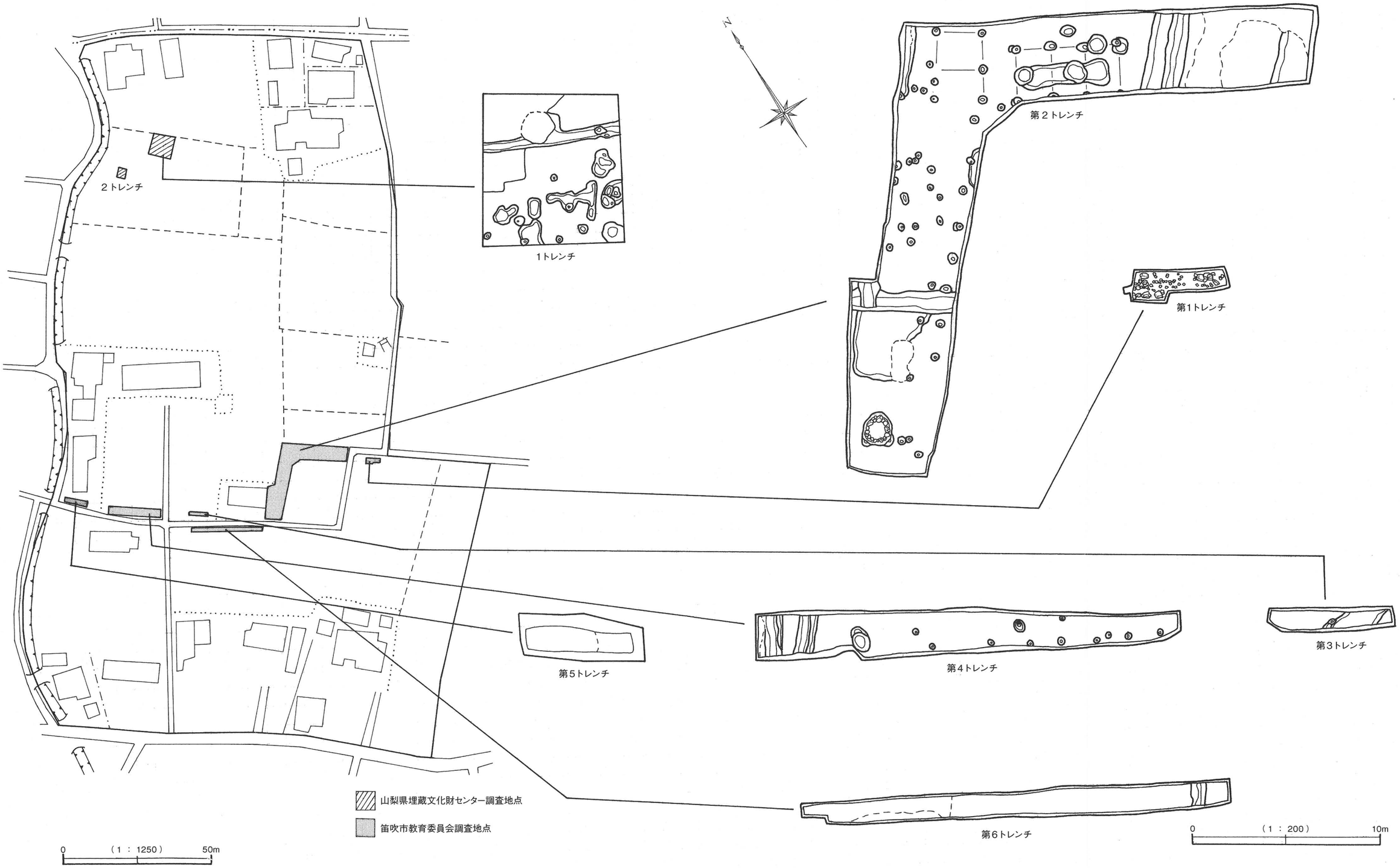
出土している。かわらけが出土している比率が高いので、地域の有力な人物が居住していた屋敷跡と考えられる。先述したように、岩下氏は、武田信縄という甲斐国の守護の妻になる人物を輩出できるような有力な家である。本遺跡は、岩下氏のような有力豪族の屋敷跡で全く問題はない。しかも、武田信虎が生まれた頃、この屋敷は機能していたと考えられ、当地で信虎が誕生したとしても、不自然ではないのである。だが、屋敷想定地の縁辺部しか調査していないので、この結論も限定的ではある。今回の発掘調査でも信虎がこの地で誕生したことを直接示す証拠は見つかるはずもない。

また、秋山敬氏によると、武田信縄は信虎が誕生したころ山梨市の落合に守護館を構えていたという。その周辺に本貫地から居を移した家臣の屋敷もあり、守護館の周辺に家臣の集住が見られるとする。だから、桂岩は信虎を川田で生んだのではなく、伝承どおり、岩下氏の館で生んだという廣瀬廣一氏の説を支持している。そうすると、今回の調査で信虎が誕生した時期にこの館が機能していたことが知られるので、今回の調査結果からも支持することができる。

まとめると、信虎誕生屋敷遺跡は、15~16 世紀初頭、16 世紀中ごろ、16 世紀末～ 18 世紀前半まで 3 時期の遺跡である。いつ頃からこの地に屋敷が営まれたかはわからないが、信虎が誕生した 15 世紀末に屋敷が存在したことは注目に値する。最後には、徳川家御三卿清水家の陣屋が置かれる頃には、岩下氏は当地にはすでにいなかったものと思われる。

(引用・参考文献)

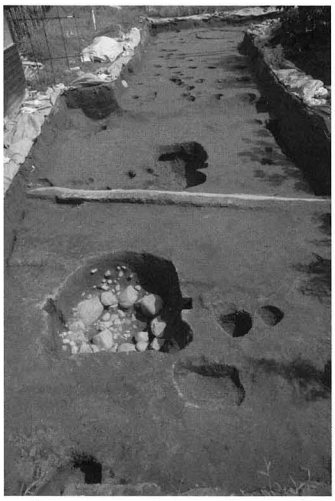
秋山敬 2006「武田信虎の生年について」『武田氏研究』第 35 号
磯貝正義 1978『定本武田信玄』(新人物往来社)
小野正敏 1997『戦国城下町の考古学 - 一乗谷からのメッセージ - 』(講談社)
春日居町 1988『春日居町誌』
春日居町教育委員会 1989『国府遺跡Ⅰ』
春日居町教育委員会 1989『椚田遺跡』
甲府市教育委員会など 2001『秋山氏館跡』
佐々木満 2004「山梨における中近世土器の様相」(『山梨考古学論集Ⅴ』)
佐藤八郎校訂 1968 ～ 1982『大日本地誌体系　甲斐国志』(雄山閣)
田端泰子 1996『女人政治の中世 - 北条政子と日野富子 - 』(講談社)
廣瀬廣一 1944『武田信玄伝』(紙硯社)
笛吹市教育委員会 2008『椚田遺跡』
福田千鶴 2007『淀殿』(ミネルヴァ書房)
平凡社 1995『山梨県の地名』
山梨県 1999『山梨県史』資料編 4　中世 1　県内文書
山梨県 2001『山梨県史』資料編 6　中世 3 上　県内記録
山梨県 2002『山梨県史』資料編 6　中世 3 下　県外記録
山梨県 2004『山梨県史』資料編 7　中世 4　考古資料編
山梨県 2007『山梨県史』通史編 2　中世
山梨県教育委員会など 1993『桑戸（後町）遺跡』
山梨県教育委員会 1984『秩父街道』
山梨県教育委員会 1986『青梅街道』
山梨県教育委員会など 2002『横町遺跡』
山梨県教育委員会 2004『埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査報告書』
山梨市 2007『山梨市史』



第28図　信虎誕生屋敷遺跡遺構配置図

図版１

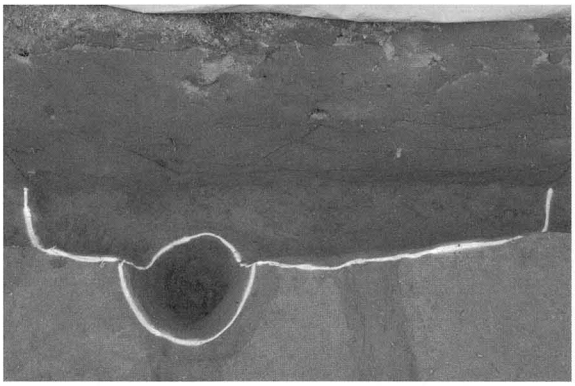
第１トレンチ全景



第２トレンチ全景（東から）

第２トレンチ全景（西から）

１号掘立柱建物跡



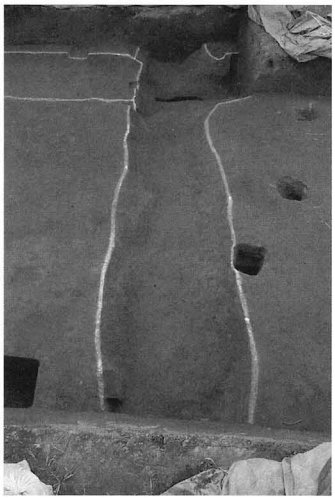
１号竪穴状遺構

１号井戸跡

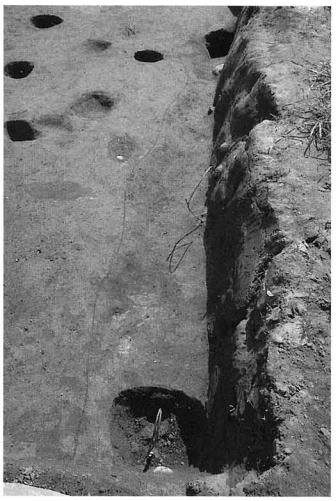
２号溝状遺構

４号溝状遺構

図版２



１号溝状遺構



５号溝状遺構

第３トレンチ全景

６号溝状遺構

第４トレンチ全景

６号土坑

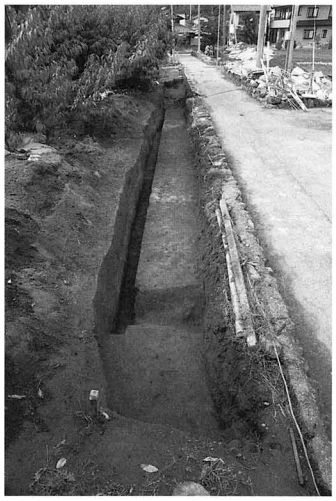
７号溝状遺構

７号土坑

図版３

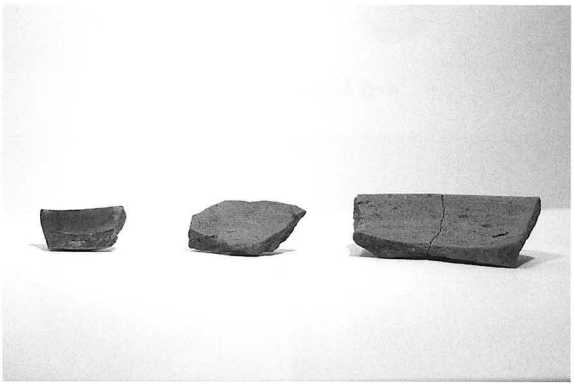
８号溝状遺構

第５トレンチ全景



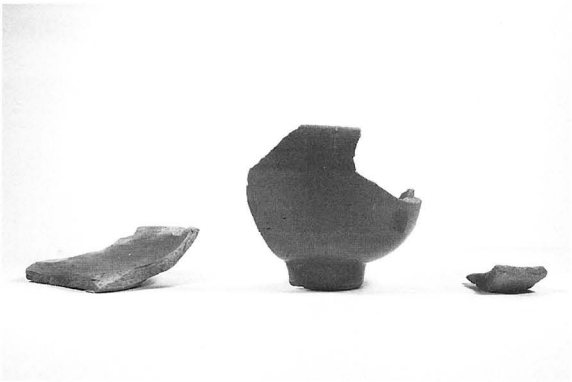
第６トレンチ全景

９号溝状遺構

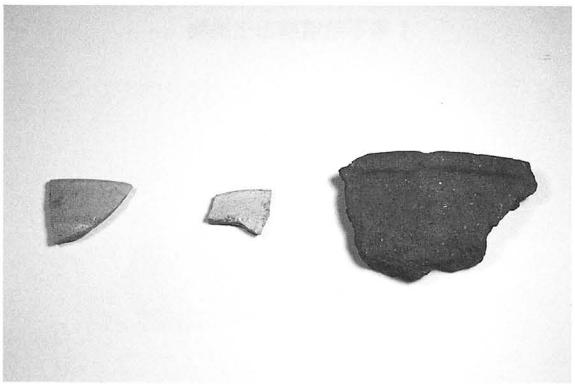


１号竪穴状遺構・柱穴列出土遺物

１号井戸跡出土遺物



土坑出土遺物

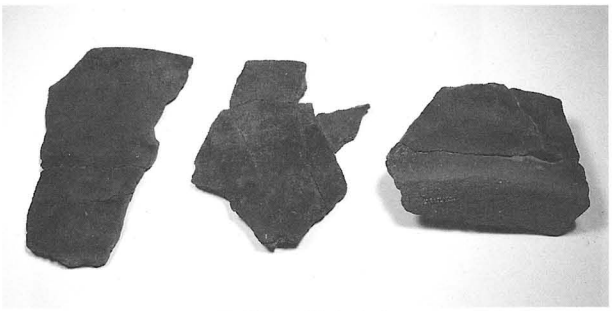


１号井戸跡・４号土坑・１号溝状遺構出遺物

図版４

１号溝状遺構出土遺物

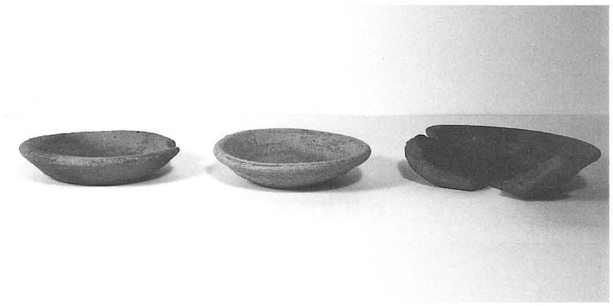
１号溝状遺構出土擂鉢



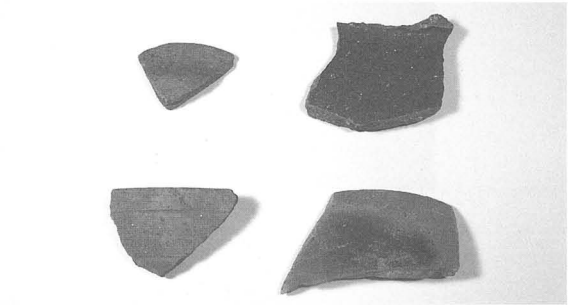
１号溝状遺構出土内耳

３号溝状遺構出土かわらけ

７号溝状遺構出土かわらけ



４号溝状遺構出土かわらけ

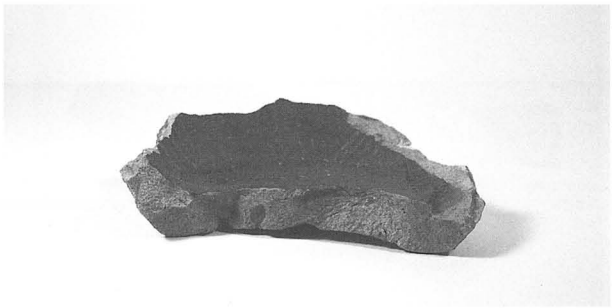


4·6 号溝状遺構出土遺物

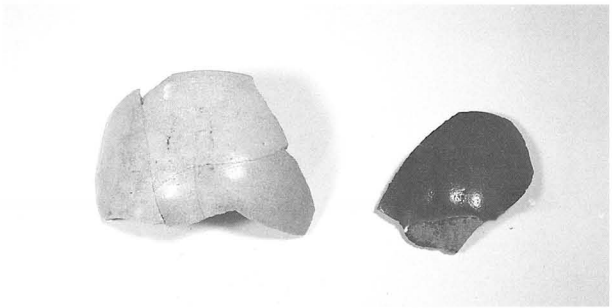
１号不明遺構出土遺物

２号不明遺構出土陶器①

２号不明遺構出土陶器②

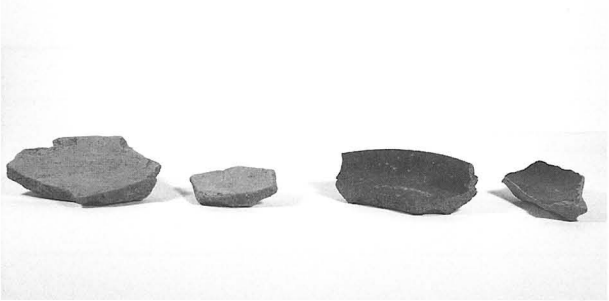


２号不明遺構出土擂鉢



２号不明遺構出土陶器③

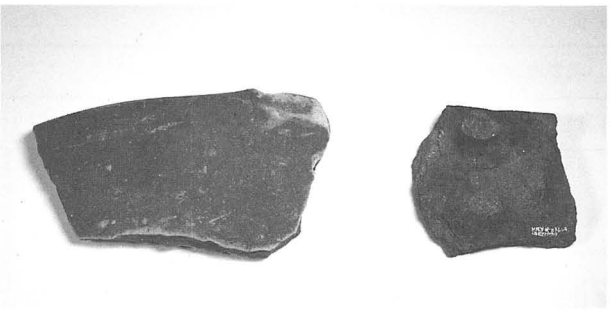
図版５



遺構外出土遺物（中世）

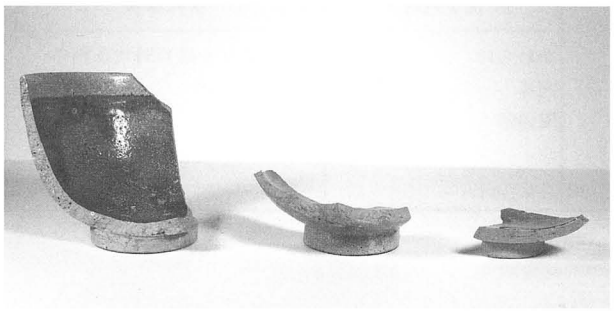
遺構外出土陶磁器（中世）

遺構外出土擂鉢（中世）

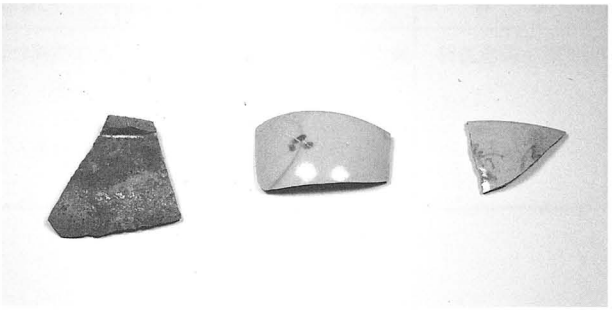


遺構外出土片口・内耳（中世）

遺構外出土かわらけ（近世）

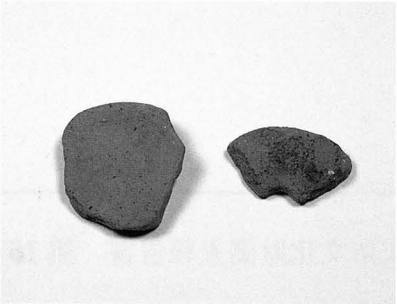


遺構外出土陶器（近世）



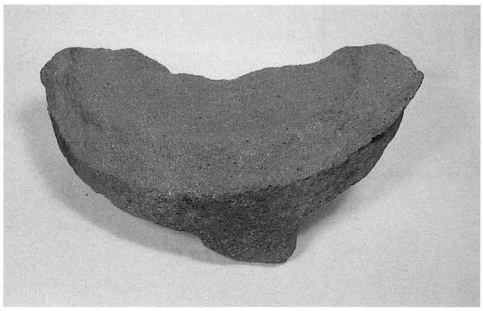
遺構外出土陶磁器（近世）

遺構外出土灯明受皿（近世）

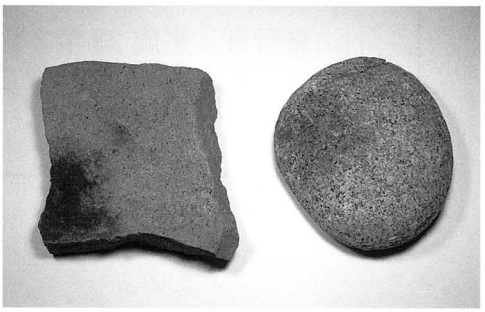


土製品

鉄製品



石製品（擂鉢）



石製品

水晶

報 告 書 抄 録

ふりがな	のぶとらたんじょうやしきいせき
書名	信虎誕生屋敷遺跡
副書名	畑地帯総合整備事業春日居第1地区支線農道第3号建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	大木丈夫
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406－0031　山梨県笛吹市石和町市部809－1　TEL 055-261-3342
発行年月日	2011年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
のぶとらたんじょうやしきいせき 信虎誕生屋敷遺跡	やまなしけんふえふきしかすがいちょうしもいわした 山梨県笛吹市春日居町下岩下 540－2外			35°40′35″	138°39′20″	2008.8.1 ～10.17	324.37	農道建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
信虎誕生屋敷遺跡	城館跡	中世～近世	掘立柱建物跡 井戸跡 柱穴跡 溝状遺構 土坑	かわらけ 内耳 陶磁器	戦国時代から江戸時代前期の豪族の屋敷跡

笛吹市文化財調査報告書　第16集

信虎誕生屋敷遺跡

発行日　平成23年3月30日
発　行　笛吹市教育委員会
印　刷　稲村印刷社

Fuefuki City Archaeological Report Vol.16

The Report of

Archaeological Research of NOBUTORA-TANJOU-YASHIKI Site

(Traditional Compound of Warlord Nobutora Takeda's Birth Place)

Archaeological Survey prior to the Construction

of Farm Road Branch Line No.3 in Area Ⅰ

March, 2011

Agricultural Department, Yamanashi Prefectural

Development Office of Kyoto Area

Fuefuki City Board of Education